AACK 京都大学学士山岳会 No.45

Newsletter

April 2008

http://www.aack.or.jp

目次

空撮で見たヒマラヤの変貌　上田　豊……1
ラダック・ザンスカール　トレッキング紀行
―ザンスカールの峠「シンクーラ SHINKUL LA」(五〇八〇m)を越えて
北インド平原へ―（後編）　松浦祥次郎……5
紀行・「ゴビ、アルタイから新疆へ（西モンゴル横断の旅）」　寺本　巖……12
「高地文明」への旅　斎藤清明……21
AACK人物抄
宮木靖雅（続）　平井一正……25
白神山地にひとり遊ぶ　荻野和彦……30
図書紹介
黄河断流―中国巨大河川をめぐる水と環境問題
福嶌義宏著　昭和堂　高村奉樹……35
AACKが京都大学に寄贈した「国際登山探検文献センター図書」はどうなっているのか？　竹田晋也……37
事務局連絡……38
会員動向……39
編集後記……40

空撮で見たヒマラヤの変貌

上田　豊

ネパールのカトマンズに、去年の一一月一八日から一二月四日まで行ってきた。地球温暖化で変化するヒマラヤの氷河と氷河湖の、報道取材に協力するためだ。

名古屋大学の研究室には、一九七〇年代にわたしたちが飛行機をチャーターして撮影したネパール・ヒマラヤの氷河の写真が、一万枚以上ある。当時の研究プロジェクト・メンバーにはAACK会員も多く、中島暢太郎、樋口敬二（研究代表者）、樋口明生、井上治郎、中尾正義、佐藤和秀、安成哲三、横山宏太郎などの諸氏がいた。

今回の企画の発端は、こうだ。朝日新聞社の武田剛カメラマンが、同社の小型ジェット機「あすか」をヒマラヤに向かわせ、山岳飛行を重ねての空撮を考えた。そこで昨春、わたしが定年退職する研究室の藤田耕史・准教授（京大山岳部OB）に協力を求めてきた。かれは名大にある写真と比較できる空撮をすれば、最近三〇年間の変化がよくわかるのではないか、とアイディアを出した。

企画は同社で認められた。一方、藤田らは文科省の科学研究費申請がパスしてその現地調査を兼ねることで、名大と朝日新聞社の共同調査が実現した。武田さんは立教大学山岳部OBで、同行記者として日本の南極観測隊で越冬、「北極異変」の取材などの経験もある。かれは名大にある七〇年代の写真から比較に適当な写真を選び出し、デジタル化する作業もした。撮影対象の不明な写真は、藤田から関係者に写真添付の電子メールで問い合わせがきた。わたしにとって、手持ちのヒマラヤ写真集などと比べて同定する作業は、それなりにおもしろかった。

空撮には一九七〇年代の当事者を一人招きたいとの新聞社の申し出で、わたしが加わることになった。科学的にも個人的にも、大いにありがたい話だった。自分たちでネパールの飛行機をチャーターするのは簡単ではなく、費用もかさむ。「あすか」はセスナ社のCitation Encore機だ。同機なら、高度一万三千メートルまで上がれる、気密式で高性能のジェット機だ。七〇年代は防寒服に酸素マスクでの空撮だったが、「あすか」は一一人乗りでも旅客機なみの設備がある。

「あすか」は一一月二一日、経由地の中国ビザのトラブルで予定より一日遅れ、わたしたちが待つカトマ

写真１　アンナプルナⅠ峰（右）から南峰（左）。南峰への初登ルートは左の氷雪斜面。（ⓒ名大環境学研究科）

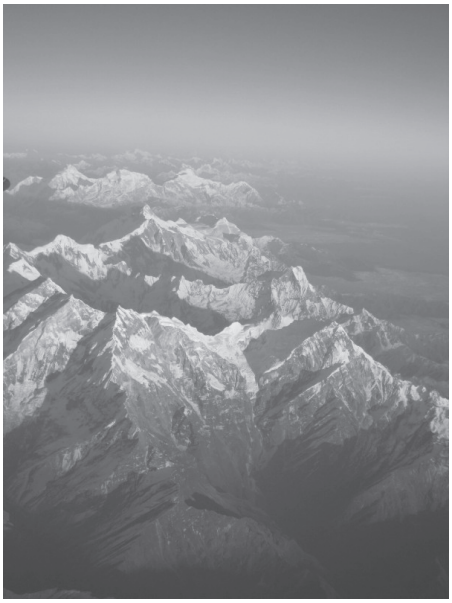


写真２　アンナプルナⅠ峰（左）～南峰（右）の稜線を前に、マナスル三山にかけての夕景。

写真３　カンチェンジュンガ山塊とヤルン・カン初登ルートを見おろす。手前にジャヌー、左にカンバチェン、遠くにシッキム、ブータンの山々。（ⓒ名大環境学研究科）

1974 年

2007 年

写真４　ここ 30 数年の氷河縮小（ヌンブールの南、ショロン地域）。一番下（南）で右に伸びる氷河は、わたしたちが精査している AX010 氷河（1978 年の全長 1.7 キロ）で、末端の後退と氷厚の減少が見てとれる。（ゴア米元副大統領の「不都合な真実」でも紹介された。）（ⓒ名大環境学研究科）

写真５　ここ 30 年で分断されたクンブ地域の EB050 氷河。1974 年には測器が立っている地点を「く」の字型の屈曲点として、測器背後の上流部と繋がっていた（全長約１キロ）。上半部の方が日当たりが良く融けやすいためと思われる。

1964 年　　2007 年

写真６　テント・ピークのここ 40 数年の変容。
1964 年：グレイシャー・ドームから右手前（南）に伸びる稜線をアンナプルナ南峰ルートから見る。
尖った２峰は左がフルーテッド・ピーク（6499m）、右にテント・ピーク（5663m）。
2007 年：1964 年の写真を右から見おろす方向。
中央上部にフルーテッド・ピーク、その下・写真まん中の黒っぽい三角斜面がテント・ピーク。

ンズ空港にモダンな機影を現した。中山由美記者（武田さんと同じ南極越冬隊に同行）も乗せ、関口博之機長、副操縦士・整備士・電気技師が各一人のクルーで来た。翌日は副操縦士の体調トラブルで、空撮は二三日から始まった。香港から外岡秀俊・前編集局長も加わり、取材態勢も整った。好天がつづき、フライトは二九日の休養日を除いて一二月二日まで計九日あった。全部で二二フライト、合せて約四〇時間になった。

二五日は、わたしたち研究者や取材担当の冨岡史穂記者などは、安成教授（名大・地球水循環研究センター）が、わたしたちのこれまでの調査のカウンターパートであるネパール政府の水文気象局と共催した国際ワークショップに出席した。『Recent Change of Climate and Cryosphere in Nepal Himalayas（ネパール・ヒマラヤの気候と雪氷圏の近年の変化）』のタイトルで、日本から五つ、ネパール三つ、イタリア一つの発表があった。

一九七〇年代の空撮には、わたし自身はクンブ～カンチ方面への一フライトしか参加できなかった。今回は結局、わたしは一九フライト、計三五時間飛んだ。東はブータンの山々、西はカイラスを望見できる所まで、ネパール・ヒマラヤの全貌を堪能することができた。全部で武田カメラマンは五四〇〇枚、名大班は左右の窓からカメラ計二台で、藤田らがカトマンズを離れた二九日以降はわたしのみの一台になったが、計三四〇〇枚の写真を撮った。

三〇年前は一九七四～七六年と七八年の四年かけて計一三フライト、のべ三〇数時間で一万三千枚撮った。今回と比べると七〇年代は、一度飛び立ったら長時間ねばり、より多くの写真をとったことになる。

一九七〇年代は調査が目的のフライトだったので、雲が山々にかかる前の午前中だけ飛んだ。今回は、フライトをリードするのがカメラマンで、パイロットも自社お抱えなので、見事なショットを求め、夕陽に映えるヒマラヤなど、姿をかえる峰々へ時刻をかえて繰り返し飛んだ。空中で旋回しながら光線の変化を待ったこともある。一一月三〇日のエベレスト夕景の撮影後は、カトマンズ空港への帰着が夜になった。座席から操縦席を通して、滑走路両脇の灯列が正面に見えた。ライトに導かれての着陸など、山岳飛行では思いもよらなかったことだ。

カメラマンの撮影専用窓は、操縦席のうしろの胴体下部から斜め下向きにあった。武田・藤田は、比較調査用に持参の七〇年代の写真と同じアングルになるように、飛行高度を変え、機体の傾きを変えるようパイロットに注文し、いくども同じ標的のまわりを時間をかけて旋回した。カメラマン以外は、普通の旅客機にあるような窓から撮影した。どのカメラにも窓ガラスを傷つけないよう、レンズの筒先にゴムのフードを付けた。

調査のための空撮は、七〇年代との比較だけでなく、将来のために現在の状態を記録として残すことにも留意した。そうすれば、今後の変動もとらえていくための指標となるので、新たに代表的な氷河を選び、よりよいアングルを求めて空撮をした。

カトマンズから東方へ飛ぶ度に、チベット側にはＡＡＣＫ初登頂のカンペンチンが、堂々とした大きな山体を見せていた。わたしが二十代のはじめに登ったアンナプルナ南峰、二十代の最後に登頂したヤルン・カンも、上空から久しぶりに見ることができ、感激した。これらは自分の小型デジカメでも撮った。

アンナプルナ南峰には一一月二四日の第一便、マナスル三山～アンナプルナ～ダウラギリ方面へのフライトで再会した（写真１）。はじめて見る高所からの角度は、登攀ルートがきわめて急峻に見え、よくあんなところを登ったものだと感心した。二六日は、アンナプルナⅠ峰～南峰の稜線を前景、マナスル三山を背景に暮れなずむアンナプルナ山群を俯瞰した（写真２）。機内も体の中までも夕色に染まったようで、みな夢見心地で空中を漂っていた。

カンチェンジュンガ山塊へは、四回も飛ぶことができた（写真３）。なかでも一二月一日は、すばらしい日となった。第一便でマカルーまで飛んだ帰途、カトマンズ空港は雲、ビラトナガールも同じく着陸できないとの無線。カトマンズに着陸を試みるも地上すれすれで視界不良のため上昇。重い不安がよぎったが、なんとかポカラ上空の雲が切れており、着陸できた。地上からのアンナプルナ展望の、ありがたいおまけがついた。

その日の三便目は夕景を求めてクンブ～カンチ方面へ飛んだ。フライトは、暮れなずむシッキムの山々を背後に、残照のヤルン・カ

ンを見おろして捉えた。わたしのカメラにも、金色からピンクに刻々と変容してゆくヤルン・カンの姿を納めることができた。

この三〇年で、ヒマラヤは思った以上に変わっていた。かつて地上をはいずりまわって調査したなつかしい氷河たちは、明らかに後退していた(写真4)。なかには、消えてしまった小さな氷河や途中で分断された氷河もあった(写真5)。また、秀麗なヒマラヤひだの氷壁が融け、汚れた地肌の斜面がむき出しになった峰もあった。一九六四年のアンナプルナ南峰の登頂後、島田・木村コンビが登った内院の秀麗なテント・ピーク(五六六三m)は、悲しくも無残な姿になっていた(写真6)。

ヒマラヤの高所が本当に温暖化しているのか、疑問を持つ研究者もいる。ヒマラヤの山麓では、観測地点数は限られているが温暖化の傾向が見られる。チベット高所の氷河コア解析でも、温暖化を示す結果もあるが信頼度に疑問も残る。そして、ヒマラヤの高所では、実測された気温データは乏しく、温暖化を明白に示す実測値はない。

だが、氷河の変動は気候の変動によっておこる。だから、実測データがないとはいえ、ヒマラヤ高所に気象の異変が起っていることを、氷河の縮小は確かに物語っている。そしてヒマラヤの氷河は気温の変化に敏感で、氷河変動の要因は気温にあることも、わたしたちの研究がしめしている。

これまでわたしは機会あるたびに、もし荘厳なヒマラヤの景観が温暖化で失われていくとしたらさみしい、と仮定形で警告してきた。しかし現実に、すでにそれが進みはじめているのを目の当たりにして、ショックだった。後世の人たちが見上げるヒマラヤは、どんな姿になっているのだろうか。

世界最高峰エベレスト一帯は自然の世界遺産に登録されているが、今回の空撮写真は前回の写真と合わせ、地球環境の変化を記録する情報の世界遺産ともいえるだろう。しかしその情報を読み解き、将来のために生かすことができるかどうかは、大きな課題として残っている。

ラダック・ザンスカール トレッキング紀行

―ザンスカールの峠「シンクーラ SHINKUL LA」(五〇八〇m)を越えて北インド平原へ―(後編)

松浦祥次郎

ザンスカール河源流域

パダム(Padum 三六〇〇m)はザンスカール河の二つの大きい支流、ストッド川(Stod)とカルギャック川(Kargyak)の合流点に開けた盆地である。地図の上では、合流点下流をザンスカール河(Zangskar)と記している。パダムはザンスカールの中心で、かつては王がいた。今もその一族がパダムに住んでいる。この付近で「ザンスカールに行く」と言えばそれは「パダムに行く」と言うのと同義である。

素晴らしい高峰に囲まれ、そのくせ圧迫感を感じない広々とした気分のする不思議なところだ。山奥に違いないが、山奥という感じのない土地である。悩みは風の強いことで、防風のための柳をあちこちに植林している。宿舎はまだ新しい感じであった。電気は来ているが時間制限がある。しかし、特段の不便は無い。町の芽生えのような短い街路が出来ているが、全体には家がまばらにたっている。産業は特別には無く、自給自足程度の農業で生計を立てている。従って、所得税は基本的にゼロだとのこと。麦やジャガイモの収穫時期であったが、作業は人力とヤク力であ

ザンスカール川の二股

る。脱穀もヤクに踏ませるやりかただ。しかし、一部に電動機の使用も見られたから、変化が迫っているのであろう。冬の厳しさは凄まじいものらしい。峠は雪で閉ざされ、地域は周囲から完全に孤立する。冬の交通は、凍結したザンスカール河を徒歩で辿るのみである。凍結が必ずしも完全ではないので、これも相当に危険なルートである。しかし、男子は一四～一五歳になると、このルートを辿ってインダス本流まで歩くそうだ。ある種の成人通過儀礼であろうか。ガイドやコック達皆その経験を持っている。総じて言えば、一年くらいゆっくりと過して見たい所だ。

九月二日（日）、三日（月）は体調整備に周辺を散策し、町のポタン・ゴンパや少し離れたトンデ・ゴンパ（Thonde Gompa）、カーシャ・ゴンパ（Karsha Gompa）を参詣した。ポタン・ゴンパへは時にダライ・ラマも訪れるとのことで、ヘリポートが整備されている。チベット仏教ゲルク派の祖師ツォンカパの開山になると言われるトンデ・ゴンパは山上でしかも水に恵まれた場所にあり、そこからのザンスカール景観の壮大さはこれ以上ないほどである。

一方、カーシャはガイドのツェワンの出身部落で、そこのゴンパはザンスカール最大である。急斜面に見事な構築で建設されている。

パダムのホテルはサービスよく安い値段で洗濯をせっせとしてくれるのでずいぶん助かった。また、此処からは我々の食事はトレッキングの一部として、我々のコックが調理してくれることとなった。思った以上に多彩な献立が出てきて驚いた。

予定では、四日（火）早朝にトレッキングに出発となっていたが、三日夜就寝中から松浦の調子が異状になり、早朝の測定で、体温三八・五℃、脈拍八五を示した。就寝中から下痢ではないが一時間ごとに便意を催す状態になっていた。阪本リーダーは出発を一日延期することを決定した。松浦はリーダーの指示通り下痢止め（ロペラン）、抗生物質（ケフラール）、解熱剤（ロキソニン）を服用し、ひたすら眠った。その結果、夕刻には相当に回復し、ルート上ムネ（Mune）までは車道が整備されており、そこまでなら引き返しが容易であるのでそこまで行って様子を見ようとなり、五日の出発は可能と期待できるようになった。このとき、阪本リーダーが調理してくれた葛湯、高野豆腐などが松浦の回復にずいぶん効果的であったように思える。

トレッキング中は原則として、午前四時起床、五時朝食、六時出発、午後なるべく早くキャンプサイトに到着とされた。隊列は、トップ阪本リーダー、セカンド松浦、ラスト谷口、セカンドとラスト間に、福本、伊藤、八太が適宜入るということとされた。なお、リーダーから、水を十分に飲むよう再々の注意があった。歩行の一ピッチは約一時間であった。

第一日九月五日、パダム～バルダン（Burdum 三六〇〇m）（五：五〇～一〇：四〇）。

松浦の調子がほぼ回復したので予定通り出発した。カルギャック川の奥に向かって道路工事が進められている。ムネ付近までは車道となっている。この道はシンクーラ峠を越えてダルチャに至る予定とのこと。何年か先はこのトレッキングルートは無いことになる。バルダンに早く着き、さらに先に良いキャンプサイトがあるというガイドのアドヴァイスで少し先に行く。何のことは無い学校の校庭なのだ。子供達がサッカーをしている。水もトイレもあり便利なところだ。この学校は地域で支援され運営されている。チベット語は公用語でないので、公立学校では教育できない。そのため、このような塾で、チベット語、英語を教えている。

我々のパーティはガイドのほか、コック一名、その助手二名、馬子三名、馬一三頭を雇っ

バルダンのテント場

ている。トレッキング中、メンバーは雨具、防寒着、非常食、水、フラッシュライト等を担ぐ程度だ。第一泊目のサイトで、自己紹介をかねてガイド、コック達と顔合わせのお茶会を開いた。Tuewang（ガイド）、Nyingbo（コック）、Tsega（コック助手）、Gyatho（々）、Thinley（馬子）、Chosphel（々）、Nyendak（々）。すべてザンスカールの住民である。

松浦の調子は問題ない。

第二日九月六日、バルダン～ラル（Raru 三九二〇m）（六：〇〇～一〇：〇〇）。

今日もごく早く予定のムネ（Mune）に着いたので、すこし先のラルまで足をのばす。ここは、かつての氷河の末端に出来た池のほとりで、素晴らしいキャンプサイトだ。残念なことにトレッカーたちがごみをそのままにしているのが多い。景色は素敵だ。この付近からヒマラヤを越えるトレッキングルートが地図に示されているが余りよくは分からない。阪本リーダーと谷口はそれぞれ付近を偵察に出かける。

ザンスカール川沿いの道

第三日九月七日、ラル～ツェタン（Tsetan 三九〇〇m）（五：五五～一四：三〇）。

谷沿いを登り降りする長丁場の一日。困難や危険は無いが、注意は必要な道。声を掛け合いながら進む。二～三時間歩く毎に、やや開けた河岸に畑が造られ、村がある。うまく灌漑がされている。この時期、畑は取入れで忙しい。取入れ後の畑でキャンプをさせてもらう。コック助手の一人が見慣れない荷を背負っているので確かめると、酸素ボンベだとのこと。非常時のための用意である。エージェントが気を利かしたのだろうか。

第四日九月八日、ツェタン～プルネ（Purune 三八八〇m）（五：五五～一〇：三〇）。

カルギャック川の左岸をひたすら坦々と遡る。短い行程で楽な道。途中、エージェント社長ラクパの出身地 Surle の脇を通った。村は道のずっと上にある。この奥地から良くがんばったものだ。立派な橋を渡って台地上のキャンプサイトに着く。近くに畑が開かれている。このキャンプサイトは良く整備され、家がある。兄弟で経営している。太陽光発電で照明を得ている。

サイトは良いが、トレッカーのごみが散乱している。午後のひと時、洗濯の後、全員でごみ拾いをする。エージェントのメンバーを徹底的に教育する必要がありそうだ。

松浦の調子はほぼ完全に回復したが、一方で伊藤が腹の不調を来たしている。

第五日九月九日、プルネ～フクタル・ゴンパ（Phugtal Gompa 往復）（五：五五～一二：二〇）。

プルネでカルギャック川に合流するツァラブ川（Tsarabu）の上流に有名なフクタル・ゴンパ（Phukthal Gompa）があり、参詣する。ゴンパは渓谷に面して崖っぷちにある。良くもこんなところにゴンパを建立したものだと驚嘆する。まるで崖にへばりついているよう

プクタル・ゴンパ

カルギャク川（ザンスカール川源流）の左俣奥の氷河と山々

だ。ゴンパの一部が洞窟になっているが、そこには湧水がある。洞窟の真上の斜面に、サイプラスの大木が一本立っている。不思議な光景だ。ひょっとすると、過去のある時期、この付近にも針葉樹の森があったのであろうか。

このゴンパに一八二五年八月から一八二六年一一月まで一人のハンガリー人（Koerosi Csom Sandor）が滞在し、初めての英・チベット辞典を編纂したとのこと。凄い話があるものだ。今もこのゴンパは、この地域の教育の中心になっている。ゴンパに太陽光発電用の設備を見たのはひどく印象に残る。カルギャックの谷沿いには、ヨーロッパの人達が支援する学校がずいぶん多くあるようだ。

伊藤は腹の不調で、一日キャンプで休養する。

第六日九月一〇日、プルネ～ヒ（Hi四〇八五m）（六：〇〇～一五：〇〇）。

高度を少し稼ぎ、がんばった一日。谷が広がり、次々と部落がある。放牧地も広がっている。途中で通り過ぎたテサ（Testha）はこの付近では珍しいほど長い。部落では冬支度がせっせと進められている。屋根に乾草や燃料が積み上げられてゆく。風で埃が凄い。普通でもかなり負担がかかるのにこんな強風の時、写真担当の八太は特に大変だ。

このヒのキャンプサイトも気持ちの良い美しい所だ。しかし、やはりトレッカーのごみが散乱している。特に許せないのは酒類ビンの破片の散乱だ。フランス人の女性がごみ拾いを始めた。谷口の声かけで我々も協力する。

第七日九月一一日、ヒ～ラカン（Lhakhang四四五〇m）（六：〇〇～一〇：五〇）。

最奥の部落カルギャックを過ぎ、一段と高度を稼ぐ。伊藤の調子も回復に向かっている。キャンプサイトの上流に聖山と仰がれているゴンボラジョン（Gonborangjon）が聳えている。良い写真スポットである。この聖山の裾を回りこむあたりから川原が一段と広くなる。夏は放牧場となっているらしい。三ピッチ目頃からひどく風が強くなり、少し雪も混じってきた。秋が一段と早足でやって来る感じだ。強風に逆らいつつキャンプサイトのラカン（Lhakhang）に到着する。

いつもはランチの頃に我々を追い越してゆく荷馬達が一向に来ない。ようやく一一頭のうち五頭だけが着いた。テントは張れたが、他の荷物が来ない。外は雪混じりの強風。「今夜は寝具なしでビバークか」と諦めた頃やっと後の馬達が到着した。聞けば、一頭が逃げ出し、隣村まで行ってしまっていたとか。良く見つけたものだ。

夕食は、メンバーの意気を盛り上げようと、阪本リーダーが腕を振るった日本食。五目すし、高野豆腐、キャベツの胡麻和え、味噌汁、日本茶。メンバーは感激し、士気大いに上がる。

第八日九月一二日、ラカン～峠への足慣らし（八：〇〇～一二：二〇）。

昨日とは打って変わった晴天。峠越えに備え、途中まで足慣らしに往復する。周辺の峰峰が真っ白な姿を現す。カルギャック左俣上方に立派な氷河も望める。

夕食には、阪本リーダーが再び棒ラーメンを作ってくれた。やはり、いざと言うときは日本食が気分を癒やし、かつ高めてくれる。

第九日九月一三日～第一二日九月一六日、シンクーラ峠越え～ダルチャ。

シンクーラ越え

九月一三日（木）、いよいよ今トレッキングのまさに山場の峠越え。天候は昨日のように晴天ではないが、悪くもなさそうである。起床二時、朝食三時。四時少し前に歩き出す。ガイドのツェワンがいつものよう先導し、阪本、松浦、福本、八太、伊藤、谷口と続く。

今日はザンスカール・トレックの社長ラクパの親父さんが一緒だ。体の不調を、お経を唱えながら峠を越え、聖地を巡礼して治すとか。ラクパが「レーの病院へ来なさい」と言っても耳を貸さない。昨日に大分上まで足慣らしをしてあるので気を楽に登れる。道も良い。

第一休止、四：二四（七二四歩）テント場上の台地（歩は出発からの万歩計の指示）、

第二休止、五：二五（三四三六歩）、

第三休止、六：三一（五五三四歩）氷河末端の小川を渡った台地の上、

第四休止、七：二五（七三二五歩）標高四九〇〇m地点、

シンクーラより南の山々を眺める

第五休止、八：〇五（八四八〇歩）峠到着。地図上は五一〇〇mあるいは五〇八〇mなどとあるが、メンバーの高度計はいずれも四九八〇m前後となっている。

全員で握手し、感激を分かち合う。峠にはチョルテンがあり、チベット仏教世界であることを示している。天候は曇りであるが、峠近くの山稜は一応見える。道は氷河を通らないが、峠近くは氷河で覆われている。峠の南側直下に小さな美しい池があり、コバルトブルーの水を湛えている。

峠の名は、多くの地図上シンゴラ（Singola）とされているが、シンクラ（Sinkul la または Sinkula）となっているものもある。ガイドの説明では、「今はシンゴラが多いが、元はシンクーラであった。シンは薪であり、クーラは持って行く意味である。此処は天候が変わりやすく以前峠越えの住民がよく遭難した。それで、「行くときは薪を持って行け」との意が峠の名の由来である」とのことであった。確かに天候は変化しやすいようである。写真撮影の後、八時五五分峠出発。

第六休止、九：一六（一〇四六六歩）、此処からは実に長い下りで、途中ちょっとした霙交じりの雪にも会い、ラムジャック（四三三五m）のキャンプサイトに到着したのは、第一一休止、一四：一四（二六七七二歩）であった。感激的ではあったが、最後は疲れた一日であった。キャンプに到着時の福本の月餅がとても美味しかった。

一四日（日）通常のように四時起床、六時出発であったが、一寸した下りで八時一五分には予定のキャンプサイトに到着した。ラムジャックのサイトは、地図上の指示よりよほど下であったのだ。ここザンスカール・スムドはダルチャに流れる無名の大きな川のほとりで、きれいに整備され、岩作りの番小屋まである。良い水があり理想的なサイトである。しかし、トレッカーが残したごみで哀れな状態だ。ここでも、我々はガイドらを督励して、一緒にごみ掃除をやらざるを得なかった。環境保全問題の基礎は考える以上に大変だ。

一五日（月）この上ない快晴の中、六時に

パルラモの南にある槍ヶ岳

出発し、一・五㎞ほど歩いた所で車道になった。トレッキングは実質的にこの地点で終わった。この日のキャンプサイトはパルラモ(Palhamo)、約三七〇〇ｍの地点。此処も小川のほとりの良いキャンプサイトである。しかし、近くに道路工事の現場テントがあったりして、トレッキングの雰囲気は大分そがれる。ダルチャまでとなっていた「禁酒の誓い」は、此処で繰り上げ解禁。

一六日（火）六時に出発し、今日は軽いと話しながら歩いているところで、我々を迎えるワゴンがダルチャからやってくるのに出会った。キャンプから三㎞ほどのところであった。

誠に唐突にトレッキングは終了した。九月五日に歩き始めから一六日の歩き止めまでの総計歩数は一九一九〇八歩、距離概算は（～一三〇㎞：誤差一〇％）程度か。

ダルチャには八時四〇分に到着してしまった。元の予定では此処に一泊し、コックや馬方達とさよならパーティをすることにしていたが、事情の変化で、宿泊を取りやめ、マナリに向かうことにする。後は乗り物任せの旅になる。サービス良くしてくれたコックや助手、馬方をねぎらう機会を失したのは残念だった。

ダルチャからマナリへ

荷物を再確認して後、ダルチャを一一時三〇分出発。マナリへの道路はこの地域で最重要の道路なのであろう、ひっきりなしに大型トラックと出会う。インド経済の活発化と辺境への梃入れがもたらしている状況であろうか。途中のロータン峠（Rohtang Top 三九七五ｍ）は予想をはるかに超すスケールの大きい峠であった。峠に着いたのは一六時三〇分になっていた。残念ながらガスで景色を楽しむことは出来なかった。少し下ると雄大な谷の景色が広がってきた。このあたりまで来ると、パラグライダーなどを楽しんでいる人がいる。雰囲気がザンスカールと全く変わってしまう。

ロータン峠からマナリ（二一二五ｍ）までの距離五一㎞、標高差約二〇〇〇ｍの下降はやはり時間がかかった。宿舎のゲスト・ハウス「ドラゴン」に到着したのは一九時であった。宿泊料の割には、良い宿である。食事も悪くない。トレッカーにはもってこいの宿に見える。

マナリは北部インドヒマラヤ入り口の最奥の町であるが、一九九〇年代後半からインドの国内旅行者が増え、さらにヨーロッパ人旅行者が増えて、現在はインド国内観光旅行のスポットの一つになっている。そのためか町はホテルの建設ラッシュにある。この付近がチベット仏教とヒンズー教の境界付近らしい。チベット仏教の信徒も多く住んでいるが、彼らは町の周辺付近に押しやられ、町の中心部はヒンズー教徒が圧倒的に多いとガイドが説明してくれた。ヒンズー教の古い立派な寺院「Hadimba Temple」があるが、チベット仏教のゴンパは見当たらなかった。時期は丁度りんごの収穫期で集散市場は大忙しの様子であった。この時期のお蔭で宿のりんごジュースは大変においしかった。

トレッキング中の楽しみの一つは「マナリには温泉がある」と言う話だった。町よりかなり高いところにある温泉場へ大汗をかいて、三・五㎞の道を歩いてたどり着くと、全くの期待はずれ。ヒンズー寺院近くの沐浴場は我々の感覚ではとても楽しめるものでない。メンバーの誰にも沐浴する気が起こらなかった。せいぜいが場外の湯口で体をぬぐう程度。湯の熱さがひどく印象に残っている。

シムラとニューデリー

マナリで三泊し、久しぶりのかなり強い雨の中九月一九日七時に出発しシムラに向かう。車は同じようなワゴンだが、この日の運転手は先日とは打って変わった攻撃的運転を楽しむドライバーであった。効率的ではあるが、ひやりとすることも再々の一日。道はよく整備されている。と言っても日本の田舎の高速道路というわけにはいかない。途中で間道を採って時間節約をしたが、シムラのホテル「ヒマニス・プレミアム（HIMANIS PREMIUM）」に到着は一六時過ぎになった。

シムラは標高二二〇〇ｍぐらいの急斜面に造られた町で、大規模にした熱海のような景観だ。大英帝国統治下に夏の首都として開発された。その名残と、インド独立の英雄の立像が町の其処此処にある。ショッピングセンターもあるが、ガイドブックで高級と書かれているほどのものではない。理由はよく分からないがこの町も野犬がやたらに多い。えらくおとなしいと言うか、ほとんどは寝ている

ので障害はないが、異様な感じがする。
　此処で最も印象的であったのは、英国統治時の総督邸跡だった。公園として一般に開放されている。建物はスコットランドのエディンバラにあってもよく似合うようなデザインである。内部にはインド独立の交渉会議がなされたときの写真が多く展示されている。この会議でインドとパキスタンの分離独立が決定された。やむをえない現実的決定であったろうが、その歴史的宿題が今も解けずに「ラダックの停戦ライン」として残っている。
　阪本リーダーがどのような感覚のアンテナで捉えるのか不思議だが、安くて感じのよいレストランをいつもうまく探し当てる。シムラでもそのお蔭をこうむり、連夜美味しくて楽しい夕食を満喫することが出来た。その結果、いい気分になった谷口の背中を押しながら、坂道をホテルまで登ることにもなったが。
　三泊の後、九月二二日（土）有名な山岳鉄道ノーザンレールウェイで再会の予感を持ちつつシムラに別れを告げる。カルカでシャタブリ急行（SHATABRI EXPRESS）に乗り換えニューデリーへ。車中でインドの列車では飲酒が許されていないことを警官の注意で知らされる。その厳しい表情が印象にのこっている。宗教的道徳が日本と全く異なるのである。
　宿泊は来たときと同じホテル。此処もトレッカー向きのホテルと見えて、ザンスカールトレッキング中に何度か出会ったドイツ人夫妻に会い、お互いに驚く。二三日、二四日のニューデリー市内と、タージマハール観光では、つくづくとインド社会の歴史の大きさ、複雑さ、難しさを印象づけられた。この国の政治家になる人の心を計り知ることは、一般的日本人には全く不可能事のようにも思われる。インドの人たちは徹底的に民主主義を信奉していると言われ、かつヒンズー教の影響が圧倒的だが、本当にごみ問題が民主主義という政治理念と宗教道徳で解決できるのだろうか。
　二五日、最後の最後まで阪本リーダーの対インド人交渉力の凄さに感心と感謝をしつつホテルを後にする。予定通りのフライトで、二六日帰国。無事にとは言えないところがインドのお土産である。紅茶やテーブルクロスは良かったが、ニューデリーの埃で、ほとんど全員がのどをやられてしまった。松浦は帰国の翌日から声がおかしくなり、完治にほぼ一ヶ月を要した。福本は病院で何種類もの薬を調剤されたとか。インドは奥が深い。

印象的風光・風物

・トレッキングの中で最も印象的で、何時までも心に残りそうなことは夜空の美しさだ。天の川をあれほどはっきりと見たことはない。まるで、宇宙は星空の美しさを示現するために存在するのではないかと思われるほどだった。
・チベット仏教：砂曼荼羅の製作過程を幾つかのゴンパで、異なった段階を実際に拝見することが出来たのは大変な幸いであった。これは現在日本のあらゆる分野で深刻の度を増している課題「知識、知見、知恵、経験を次世代にどのように承継するか」を考える上で種々の示唆を与えてくれる。承継の形と実質、教える人、教わる人、実行システム、これらが見事に構成されている。しかも、極めて長期に多くの場所で承継が続いている実績には感嘆を久しくする。さらに、せっかく苦労して造った作品を、祭事が終わると「存在の永続は穢れを蓄積する」との思想で、さっさと水に流してしまう。ハードに拘らず、ソフトを重視する象徴的な行事だ。同時にソフトを時にハードに表現してソフトの本質を確実に保つ知恵に感心する。
・人々への教えに象徴的に示されているものに、六道輪廻（天界、人間界、修羅界、畜生界、飢餓界、地獄界）がある。この中で、天界が輪廻に入っているのが興味深い。天界、いわばパラダイスに行ければよいと思うが、「天界では満足して何も考えず、ために真の悟りに至れない」との考えは、難しく、厳しい。
・山奥の瞑想院の設置・運営も興味深い。これも見事な教育システムの一環であろう。ここに二〇年以上留まっている柔和なお坊さんの表情を思い返すと、このようなシステムを維持すること自体が、一つの知恵だと気づかされる。
・チベット仏教で、吉祥歓喜天が非常に重視されているのは意外であった。その意味をもっと深く知りたいものだ。
・ダライラマへの人々の尊崇の篤い事は想像以上である。当然のことであろうが、どの

ゴンパでも僧侶の勤行場の最も重要なところに肖像写真が鄭重に飾られている。ダライラマが訪問することが、それ自体大変な重大事と受け取られている。その影響力の大きさが中国政府の頭痛の種であるのが良く理解できる。

・環境保全に太陽光を重視することは、ラダックのように晴天日数が極めて多く、日照が強いところでは分散エネルギー利用として有効だ。照明や、クッキングの助けにはなる。しかし太陽光のエネルギー密度は低く、大規模・集中利用には、蓄電システムの画期的な進歩がない限り不可能である。ラダックでの努力は高く評価するものの、レーの経済的活況を見ると、その努力を有効に生かすには相当の知恵と、一般民衆の受容意識の高揚が不可欠であろう。

・ノープロブレムはプロブレムの始まり。このことを何度目にしたことか。ノープロブレムと聞いて、それだけで安心し手を抜いて何かが起これば、それは自分の責任となる。とにかく、自分で確認することが必須である。誠にしんどい社会だ。

・環境保全へのトレッカーの心がけを、徹底的に鍛える必要がある。これは善意の努力のみでは不十分で、時に強制力を使う必要があるように見える。同時に、現地の人々の意識改革も何とかしなくてはならない。

・松浦にとって最も大きな成果は、体重がトレッキング中に五kg弱減少したことだ。長年の課題を一挙に達成できた。また、腹の不調を回復するために少量の食事をよく噛む訓練をした結果、少量の食事でも荷物を持って歩くことが十分可能なことを実証することができたことであった。

次のザンスカール・トレッキング

今回のザンスカール・トレッキングを振り返ると、この地域の一番基本的ルートを歩いたことが良く分かる。その最大の成果はザンスカールがまさに高地トレッキングの宝庫であり、さらにまだ開拓の余地さえあることが見えたことであろう。無名の未踏峰もいくらでもと言えるほどにありそうだが、その地形の様子を観ると我々の年齢と技術で挑戦できそうなものはかなり限られる。

一方、トレッキングルートを見ると、すでに開拓されているルートでも、まだまだトレッカーも少なく、魅力的な選択がずいぶんにある。メンバーの中でいろいろ話が出ていたが、松浦自身も機会を作って挑戦したいと思うルートは、ラマユルからパダムまでのザンスカール山脈を越えるルート。これには七つの峠越えがあるとのこと。

もうひとつは、パダム近くのアティン(Ating)からヒマラヤの北西端を越し、チェナブ(Chenab)川ほとりのグラブガル(Gulab Garh)に下り、ダルチャに至るルート。こちらは五三三〇mの峠オマシラ(Onasi La)を越えるほか、二つの氷河も地図に示されており手強そうであるが、阪本リーダーや谷口は将来の候補として大いに関心を示している。

その他、地図を眺めると、あこもここもと枚挙に暇が無い。足腰が何時まで保つか、体と競争である。とにかく、体調・体力を保ち、準備よく、余裕を持って挑戦するに値する地域である。今回は阪本リーダーにこのことを良く教えられた。

紀行・「ゴビ、アルタイから新疆へ（西モンゴル横断の旅）」

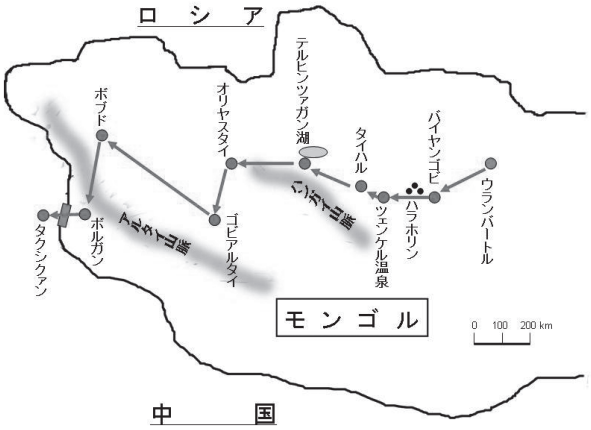
寺本　巖

一昨年秋の感動の雲南・東チベット考察団参加に続いて、昨年七月笹谷哲也リーダー率いる訪蒙団「ゴビ、アルタイから新疆へ」のメンバーに加えてもらい、初めてモンゴルを旅した。四駆車で首都ウランバートルから西へ二〇〇〇km、ゴビの大草原を走りアルタイ山脈を越えて、モンゴル最西端のボルガンから出国し中国新疆に入ろうという計画である。

実は、いわゆる「ベベツアー」に私が参加するのは今回が五度目である。いままでは、内モンゴル、新疆、チベットなど、辺境とはいえ、中国の国内だった。笹谷リーダーの豊富な知識と経験、卓越した語学力、長年にわたって国中に構築した人脈網などが、中国の旅の成功に与って力があったことは紛れもない事実である。そこに彼の強い責任感と慎重な配慮が加わって、常に楽しい旅にしてくれた。

ただ今回は、やや勝手が違ったのではあるまいか。笹谷にしてもモンゴルの車の旅行は初体験である。整備の進んだ中国国内と違って道路事情もよくわからない。この点を考慮した笹谷リーダーは、ガイド通訳二人を含むメンバー九人に対して四台の四駆車を用意させた。一台あたり平均乗員がドライバーを含めて三人という贅沢さである。不慮の事故に備えての配慮だ。一台や二台動かなくなっても残りの車で完走できるのだ。因みに、昨年秋の川蔵南路三〇〇〇kmの旅では、一二人の乗客に四台の四駆車であった。

次に、言葉である。さすがの語学の達人も、モンゴル語まではテリトリーにない。目に触れる文字はすべてキリルである。そのために、ガイドのバートルのほかに通訳として、彼のいとこの名をモンキー（正確な名前は知らない）というモンゴル系の若い中国女性を東京から連れて行くことにした。



ルート概念図

食糧事情も心配の一つだった。事前に各種手配などのためにウランバートルまで笹谷と野村が行ってくれたが、その報告ではさすがのグルメ二人もあの羊肉と油のモンゴル料理は食べられないという。

笹谷夫妻は、さまざまな食品をぎっしり詰めた大きなトランクを日本から運んできてくれた。現地に入ってからも、カップ麺や生野菜を調達してくれた。これらの食材とウランバートルで仕入れた鍋・コンロなどは、早朝出発時や人家のない草原での昼食には非常に役立った。案外だったが、外国人が訪れるリゾート地やツーリスト・キャンプでは、結構美味しいメニューに出会えた。かくして、終始食欲が落ちることなく、下痢に罹ったメンバーもいなかったようである。

そしてこの計画の成否を決める最大のキーポイントは、第三国人の通過は許されないと言われているモンゴル最西端のボルガンから中国新疆タクシクファンへの国境越えである。日本出発前、メンバーの一人田中が知人の在ウランバートル日本大使館員に計画を知らせたところ、そんなリスキーな計画は止めた方がよいと言われたという。西部国境は通過不可能だし途中のルートには病院も警察も期待できないので、中止を勧告しますとのメールを受け取っている。この点についても笹谷リーダーらは、事前に東京駐在のモンゴル副大使と何度か食事を共にし、よしみを結んでくれていた。後述するようにこの友好関係は、僻地国境でのモンゴル出国に圧倒的な威力を発揮したのである。

計画のごく大まかな日程は次の通りである。

七月四日日本出発、北京経由で五日ウランバートル入り。七日にウランバートルを出てゴビ砂漠を走り抜け、アルタイ山脈を横切り、一六日モンゴル最西端国境の町ボルガン着。一七日国境を越えて中国新疆へ。アルタイ・精河・昭蘇などを訪れ、二四日伊力より空路ウルムチへ。北京経由で二七日日本帰着という二四日間の日程である。

参加メンバーは、笹谷哲也リーダー、アサミ夫人、寺本巖の三人は大阪関空発着組。野村高史、田中健一、園江夫人、島田喜代男の四人が東京成田発着組。ほかにガイドのバートルと通訳のモンキーが北京から同行した。新疆に入ってからは、ガイドのドルジが加わった。

以下は、前半のモンゴル横断の旅の報告というより簡単な紀行である。

七月五日

北京から空路ウランバートルへ。空港まで迎えに来ていた四台のトヨタ・ランドクルーザーで市内のハーン・パレス・ホテルに昼過ぎに到着。この四台でここから二三〇〇km西

のボルガンの国境までゴビ砂漠・アルタイ山脈を越えて大草原を走ることになるのだ。
午後は、ザウサン・トルゴイなど市内見物。

七月六日

スーパーマーケットでカップ麺や缶詰などの食料と、鍋やガスコンロなど調理具を買い込む。
バザールを見物。日差しの強い土地柄、サングラスを売る露店が非常に多い。野村が一つ買うというので、複数持ってきた私が一つ貸すことにした。そのむかし、サンフランシスコで買ったレイ・バンの折りたたみ式の珍品である。野村がかけると実によく似合う。三週間の長旅の間毎日のように愛用してくれて、とうとう返せとは言えなくなってしまった。
バザール前の広場のあちこちに電話機を持ったおばさんがいる。普通の固定電話の受話器のようだが、電話線が出ているわけではない。移動式の公衆電話らしい。利用しているお客は見られなかった。
夜は、モンゴル旅行社社長のモンキサイハン夫妻ご招待の中華料理。社長のお兄さんが東京駐在のモンゴル副大使である。今回の旅の計画の段階から、笹谷、野村、島田などが東京で何度かお会いして誼を結んでくれている。この友好関係が、二週間後、ここから遙か二〇〇〇㎞西の出国口からのモンゴル脱出に決定的な威力を発揮することになる。

七月七日

いよいよウランバートルを出発だ。
スフバートル広場では、騎馬兵の衣装を着けた男たちが集まっている。ナーダムの開幕なのだ。記念写真を撮り合う。
市街を出たところのガソリンスタンドで給油する。各車の屋根には五〇リットルくらいのポリタンク二個ずつのスペア燃料が載せられる。スペアタイヤも各車に三本ずつ合計一二本積んでいる。結果的にはあの悪路を四台がそれぞれ二〇〇〇㎞以上走ってパンクは一台一回だけだった。
ガソリンスタンドの直ぐ外に道標看板がある。アルタイまで一〇〇一㎞、ホブドまで一四二五㎞とある。我々はさらにアルタイ山脈を横断して、そして通常は第三国人の通過は許されないというモンゴル最西端の出国口から中国新彊へ抜けるのだ。
走り出すと直ぐに舗装道路は終わり、ゴビ砂漠に突入する。本来、ゴビとは砂漠という意味だそうだから、ゴビ砂漠のゴビは固有名詞のようなものだろう。広大な砂漠に轍が何本も走っている。道路とは呼べない道だ。もちろん道路標識なんか全くない。三〇〇㎞ほど西へ走ったとき、先頭車が突然左へ折れた。トイレ休憩かなと思っていると目的地への分岐点だった。何も目印のない砂漠の中で、どうして脇道への入り口がわかるのか、不思議である。
かくして、今夜の宿泊地バイヤンゴビのツーリスト・キャンプに着く。初めてのゲル泊だ。中は予想以上に明るくて清潔だ。中央にストーブがあり、周りにベッドが二〜三台。小さなテーブルと腰掛けもある。電気も来ている。非常に快適なアコモデーションである。食堂ゲルの中には鳥が巣を作っており、中にいる小鳥に母親鳥が餌を運んでいた。
駐車場に「OFF THE MAP TOURS」と書いた戦車のような大きなバスが停まっている。巨大なタイヤを六輪も履いている。これならどんな悪路でも走れそうだ。二m位の水深の川の渡渉も平気だろう。並んで停まっているランクルが可愛らしく見える。イギリスの旅行社のものらしいが、ドイツ人の旅行グループが乗っている。

七月八日

バイヤンゴビを出発して七〇㎞ほどでハリホリンに着く。世界遺産に登録されているというエルデニ・ゾーを見学する。卒塔婆の塔と外壁に囲まれた広大な境内の中にお寺がいくつか建てられている。立ち並ぶ塔を見て酷暑のカラホト（黒水城）を思い出した。初めてベベツアーに参加したときのことだ。炎天下の砂の中から木簡や古銭を拾ったものだ。そんな話をアサミさんとする。
ふたたびゴビを走って今夜の宿泊地標高一六五〇mのツエンケル温泉に着く。早速温泉に入る。露天風呂だ。チベットで入った温泉と違って、水着着用の必要なしとのこと。男女用に一応二槽あるが仕切りも目隠しもない。事実上混浴だ。われわれ男どもは素っ裸で入ったが、さすがに女性はみな水着を着ていた。いい湯だった。

七月九日

出発して直ぐに道草だ。草原で馬を連れた二人の少年を見つけ、馬に乗せてもらう。代わる代わる乗って騎乗姿の写真を撮るだけのことだが。

こんな時には、お礼のつもりでなにがしかのお金なり、持ち合わせのキャンデーなどをあげることになるが、私はみんなと違うやり方をしている。ポラロイド式のインスタント写真だ。撮られたその場で浮かびあがって来た自分の映像を見て本当に喜んでくれる。一枚ずつしか渡すことができないので集合写真などには適さないが、自分の写真など撮ってもらう機会などあまりないような人たちには嬉しい贈り物に違いない。

ナーダムの競馬

途中の町の市場で、生野菜を買い込む。

昼食のためにタイハル・ツーリスト・キャンプに立ち寄る。広々とした草原の中の小ぎれいなゲル・キャンプである。あまりに気持ちのいい環境に魅せられて、ここにチンを決め込む。実は予定より一日早く喧噪のウランバートルを出発していたのでここで貯金を使うことができるのだ。

ここに泊まることにしたおかげで、午後近くで行われたナーダムの競馬を目の当たりに見ることができた。大草原を少年たちが馬に鞭打ちながら砂塵を上げて疾走する姿のかっこよさ。商業競馬のように馬上うつ伏せになって走るのではなく、ピンと背筋を伸ばし手綱の先端を鞭にして左右の馬尻を交互に打って駆けるのがモンゴルの競馬だ。早さよりもその騎乗姿に惚れてしまう。

残念ながらナーダムの相撲は別の日とかで見ることができなかった。

七月一〇日

一台のランクルがパンク。幸い四台のうちの三番目を走っていたので前後の二台が気づいてタイヤ交換に協力できた。この大草原の中では携帯電話は文字通り圏外だし、車同士の緊急連絡はヘッドライトのフラッシュくらいしかない。それも走行中なら大砂塵で遮られて見えないだろう。

それにしても、このドライバーたちの自動車メカの修理能力にはいつも敬服している。

かつてパキスタンからカラコルムハイウエイを走って中国へはいるバスツアーに参加したが、フンジュラブ峠の直前でバスのエンジンが止まってしまった。何のトラブルかわからなかったが、乗客たちが外で待つ間に運転手と助手がアーミーナイフ一つで二時間後には立派にエンジンがかかるように直してしまった。

一昨年だったか、やはりベベツアーで西寧から青海省黄河源流アムドを経て成都まで走行したとき、一台のキャブレターのパイプが破損した。なんとボールペンの芯チューブの中のインクを洗い出して、パイプ代わりとして一五〇〇㎞成都まで無事走り続けた。

今回も、草原の悪路でトラブルがいくつか

テルヒーンツァガン湖畔キャンプ

起きた。パンクごときは故障のうちには入らない。次に起こった事件は、一台の左前輪のディスクブレーキの効きがおかしくなったことである。見るとブレーキオイルが漏れている。どうやら振動でＡＢＳ（Anti-lock Braking System）部の取り付け位置が移動してブレーキオイルパイプに傷をつけたらしい。パイプを取り替え、ＡＢＳの取り付けねじを締め直して一ピッチ走ったが、やっぱり片効きなのか走りにくいと見えて再修理。結局、ＡＢＳ装置なんて余計なものが付いているからいけないのだと、左右両方のＡＢＳを取っ払ってしまった。以後は快調に走った。

考えてみれば、この大草原の悪路には、近代モータリゼーションの産物であるＡＢＳなぞ無用の長物かもしれない。

昼食に立ち寄ったレストラン・ゲルの中にはオオカミの頭付きの毛皮が敷物や壁掛けとして何頭分も飾られてあった。

四時半頃、「魚の産地」という名のテルヒーンツァガン湖に到着。ここまでの走行距離七三〇㎞。湖岸のあちこちにゲルのキャンプ村がある。湖に突き出た岬の張られたゲルに分宿する。ここで二泊の予定だ。

七月一一日

モンゴルの旅ほぼ中日の今日は、魚釣りを楽しむ休養日だ。

日本出発前から、開高健が釣ったという幻の魚「いとう」を釣るのだと笹谷や島田が釣り道具一式を七人分を用意してくれていた。ウランバートルの釣り道具屋で疑似餌などを買ってきた。

しかし私は釣りというものをやったことがほとんどない。子供の頃、瀬戸内海網干沖で小舟から糸を垂れて白黒の縞模様の鯛を釣ったのが唯一の経験だ。だいたい、釣りに上手下手があるというのがわからない。バカな魚の居場所を知っているかどうかだけではないかと憎まれ口をたたいて釣り天狗に鼻で笑われたことがある。

立派な釣り竿に仕掛けをつけて貰って、岬の先へ出かける。初めて経験する投げ釣りというのだが、餌のついた糸先が遠くへ飛ばない。それどころか、針が水底の岩にひっかかってしまったり、糸がもつれていわゆるお祭り状態になってしまう。そのたびに後始末に時間がかかってイヤになってくる。とても「いとう」どころではない。周りを見ると、島田が魚らしいものをつり上げかけたが結局取り逃がしてしまった。そんな場面も一度きりで、あとは「あたり」一つ来ないで終わった。

この「魚の産地湖」には魚はいないと言うことに決めて、午後は近くの川へ出かける。運転手たちが釣れそうなサイトを何カ所か物色してくれて試みたが、投げ糸の飛距離は伸びたものの全員無収穫に終わった。笹谷が最後に言った。「開高健は、ここに一週間以上滞在してやっと『いとう』に巡り会った」。

この湖畔キャンプには簡素ながらシャワー設備もあるし、たぶん手洗いのラウンドリー・サービスもある。嬉しかったのは、食堂ゲルのキッチンの心遣いだ。われわれ日本人グループのために、工夫して天ぷらや巻き寿司を出してくれたのには驚いた。キュウリやソーセージを具に韓国海苔で巻いた巻きずしの味はなかなかのものだった。

七月一二日

ハンガイ山脈のソロンゴ峠を越えてザブハン県に入る。峠には必ず「オボ」と呼ばれる大きなケルンがあって、立てかけられた柳の枝にモンゴル色の青色の布がかけられている。チベットなら白だ。運転手たちはオボのあるところでの休憩のたびに、なにがしかのお供えしてお祈りをしたあと時計回りに三回まわる。

今日の昼食は、湖畔の宿舎で作ってもらったお弁当である。昨晩の残り物のソーセージ巻き寿司も入っているが、高温下で時間が経っているので遠慮する。

川原で川の水を汲んでお湯を沸かす。二つの大きな鍋やガスコンロ二台などはすべてウランバートルのデパートで仕入れてきたものだ。川の水はもちろん水道の水も生水は危険で飲めないから当然煮沸する必要がある。笹谷夫妻がはるばる日本から運んでくれたトランク一杯の食料品の中からいろんなものが出てくる。広い川原に広げた小さいグラウンドシーツ一杯並べて青空のもと楽しいピクニックだ。

大草原を走る、走る。平坦なところでは、何本も車の轍があるが、どれが凹凸が少ないのか見分けながらハンドルを操っている。それでも時速八〇㎞くらいでぶっ飛ばすので、すごい砂塵を巻き上げる。横風がないときは

いつまでも砂煙が残っているので、前の車と車間距離を数百メートルとらないと窓を開けておれない。しかしいい気持ちだ。こんな大草原を見ると、できることなら馬で駆け回りたいという衝動に駆られる。それをいま、ランクルでイメージしながら走っている。遠く近くに遊牧民のゲルがあり、羊、ヤク、馬、ラクダ、山羊、ゾーなどの群れが草を食べている。典型的なモンゴルの風景だ。

ナーダムの相撲会場に通りかかった。しかしすでに取り組みがすべて終わり優勝者の表彰式が行われているところだった。優勝キャップをかぶりメダルを首にかけた朝青龍によく似た優勝力士らと記念写真を撮るだけしかできなかったが、こんな強そうな大男が無制限に日本にやってきたら、大相撲だけでなくわが国のすべての格闘技は征服されてしまうのではないかと思った。

ゴビオリヤスタイのホテルに泊まる。ゴビオリヤスタイは、たしか大相撲の安馬の出身地だ。

渡渉

七月一三日

朝出発の準備をしていると、ホテルのマネージャと言う小柄なかわいい女性が片言の英語で話しかけてくる。久しぶりに聞く英語である。ウランバートル大学のアルタイ分校で英語の勉強をしているのだと言って、教科書ときれいな筆跡のノートを持ってきて見せてくれる。会話に加わった田中に一生懸命英会話のレッスンを受けている。別れ際、彼女が私に何か日本語らしいことを言った。わからないのでキョトンとしていると田中が通訳してくれた。「『ワタシ、アナタアイデス』と言いましたよ」。

アルタイの町目指して大平原の中をひたすら走る。見渡す限りさえぎるものが何もない三六〇度の地平線。前方にまっすぐ延びた道が、かなたの地平線と「T」の字を作って消えている。何年か前に走った内モンゴルのゴビでも地平線に感動したが、日本では五〇数年前の知床遠征時に北海道の原野で見た地平線が唯一である。

大平原を快調に飛ばすが、おかげで昼食のサイトが見つからない。一三時半頃、タイシンゴルの橋の橋守さんの家をお借りして、笹谷が棒ラーメンに腕を振るってくれた。はるばる運んできた野菜をぶち込んだ本格的ラーメンに舌鼓を打った。

ラクダのキャラバン

七月一四日

今日はホブドまで四二〇㎞の長距離ドライブだ。朝食は出発後一時間あまり走った招待所でビスケットなどをかじる。お湯を沸かして貰ったが、そのための水は受注後バイクでどこかへ出かけて汲んできた。砂漠の中にぽつんとあるこの招待所は長距離ドライバが休憩や宿泊に利用する簡易宿泊施設だ。食堂の同じテーブルでは、ウランバートルから走ってきてカザフへ帰る途中だという若い男が、

カップラーメンならぬカップマッシュポテトを食べていた。隣の部屋を除くと簡易ベッドが六つ並んでいた。部屋はこの二つだけである。外に小さなゲルがあり、キッチン専用になっている。

朝アルタイを出発してから砂漠を走り続けホブドのホテルに入ったのは一二時間後の午後七時だった。大都市のはずだったが、ガイドのバートルが決めたホテルのファシリティがあまりにもひどく、シャワーもなければ、トイレの便座もあったり、なかったり。ホテル内にレストランがないので、外に夕食のとれるレストランを探しに行ってきたが、ナーダム休日ですべて休業中だという。一二時間の長旅の後ようやくたどり着いた期待の大都市（？）で、夕食抜きか？

ここでまた笹谷リーダーの怒りが爆発した。「また」というのは今回のバートルのガイド振りは初日から問題を何度も起こしてきたからである。数え上げればきりがないが、ほとんどは酒の飲み過ぎが原因で、私も湖畔の夜には被害を受けた。何はともあれ、今夜の夕食はわれわれ自身で何とかしなければならない。

そう言えばこの町に着いたとき「地球の歩き方」に載っているホテルを見かけたというので行ってみることにする。看板に英語も書かれているボヤント・ホテル、レストランもちゃんと営業していたし、客室もずっとましだった。ここホブドには二泊する予定なので、明朝このホテルに移ることにする。

七月一五日

今日はモンゴル最後の大都市ホブドで明後日に迎える国境越えに備えて休養日とし、お土産などを買ってトゥグリク紙幣を使い切ってしまおうと決める。

私には、初めて訪れたモンゴルでどうしても買って帰りたいお土産が一つだけあった。岩塩である。スーパーマーケットで、五〇〇gパックを三袋買った。キャスターの付いていない私の旅行バッグに入れると重いかなとは思ったが、まさか帰路中国の空港で再三荷物検査で疑われるとは思っても見なかった。袋にはキリル文字しかプリントされていないので、読めない中国人の税関員にはなかなか理解して貰えない。ほかにも同じように持参している仲間がいるのに、なぜか私のだけが何度もひっかかった。麻薬の運び屋らしい顔がいけないのだとからかわれた。原価は安いものだが、これだけ苦労して持ち帰った塩である。大事に使いたいと思う。

この町で久しぶりに交通信号機が一機あるのを見つけた。青色はなんとあの発光ダイオードである。いつ通っても青色は点いているが、ほかの色が点灯しているのを見たことがない。

夕方、バートルがボルガン税関の副所長というおばさんを連れてきた。ナーダム休暇でここホブドの実家に帰ってきていたが、休暇もお終いなので国境の職場まで便乗させて欲しいという。その代わり、国境の町ボルゲンまでの数十㎞短縮できる近道も教えるし、通関でもできる限りの便宜を図ってあげるというのだ。この手のバートルの連れてくる友人というのは何となくうさんくさいのだが、困難が予想される国境通過に少しは役に立つかもしれないと笹谷リーダーはとりあえず便乗を許可した。しかし、四人の運転手も知らないという近道ルートの方は、彼らの上司であるモンキサイハン社長のウランバートルからの電話の一喝でリスクを避けることになった。七人の日本人客を乗せた車を二〇〇〇㎞彼方へ派遣している旅行社の社長としては当然の決断だろう。かくして明日はアルタイ山脈を越えて国境の町ボルゲンまで四二〇㎞のモンゴル最後の長距離ドライブとなることになった。

七月一六日

標高三〇〇〇mのアルタイ山脈越えの長時間ドライブを覚悟して朝食もとらずに出発する。四台のランクルの先頭車助手席には、スイカ腹と名付けた税関副所長おばさんが乗っている。勝手なルートを採ったりされないように笹谷リーダーがお目付役で同乗しているが、通訳のバートルは昨夜も深酒したのかものの役には立たないようである。一時間あまり壮大な山岳ドライブのあと見晴らしの開けた草原でビスケットの朝食を楽しんだときも、彼は車の中で熟睡していた。

紺碧の空のもと広漠な草原の砂利道を大砂塵を巻きあげながら四台の四駆が走る。アルタイ横断は、三つ目の峠が最高点だった。私の高度計で二八八〇mだった。

昼食は、ウランバートルから運んできた日

清カップラーメン。例によって、川の水を沸かした熱湯をカップに注ぎ三分待って、みんな立ち食い。うまい。

麓に下るにつれ道がよくなって予想以上に飛ばすことができ、五時頃にはブルガンに着いた。ここでモンゴル最後の夜を過ごすわけだ。そして明日はいよいよ問題の国境通過だ。

ところがである。ここで私の心胆を寒からしめる事態が発生した。ウランバートルから一二日間にわたって二〇〇〇km以上も走ってきた四台のランクルが、今夜ここから引き返すというのだ。私たち全員と荷物を残してである。運転手たちがパスポートを持っていないので、国境を通過できないという。それは話が違うではないか。

国境には、モンゴル出国検査所と中国入国検査所との間に、何百メートルかのニュートラルゾーンがある。その間の荷物輸送はどうするのか、キャスターの付いていないバッグを運ばねばならない私には大問題である。だからこそ、ウランバートル出発以来何度もバートルに確かめたはずだ。彼の返答はいつも同じで私を安心させた。「この四台のランクルが国境を越えて中国側のタクシクァンまで皆さんと荷物を運ぶ。そこには中国国際旅行社のマイクロバスが待っている」と。その話が国境越えの前夜になってひっくり返ったのである。まして、国境はこのブルガンからまだ数十km先にある。さあどうする？

ここで、ホブドから便乗してきた「スイカ腹おばさん」税関副所長が登場する。国境越えに慣れたタクシー三台に明朝迎えにくるよう予約しておくから、それに乗って皆さんは荷物ともども中国側のマイクロバスの待つタクシクァンまで行けばよろしい。自分も明日九時から税関の勤務に就くので、国境まで同乗させてもらいたいという。完全に足を失った今、このスイカ腹おばさんの提案に賭けるしかない。笹谷リーダーの決断だ。

精算をすませた四台のランクルはどこかへ消えていった。

アルタイ山脈を越える

草原をひた走る

カップ麺での昼食

七月一七日

いよいよ文字通り最大の難関に直面する朝を迎えた。通常は第三国人の通過は許されないというこの出国口。ウランバートルの日本大使館員には、ここからの出国は無理ではないかとさえ言われている。しかしわれわれには、笹谷、野村、島田らが早くから誼を結んでくれている東京駐在のモンゴル副大使という切り札がある。なによりも、昨夜笹谷リーダーが言った「まいないを拒絶した役人はいない」と言う一言が小心の私を妙に安心させている。

スイカ腹おばさんが調達してくれた三台のタクシーとは、大型の乗用車と旧式のパジェロとロシア製のジープだった。分乗して国境へ向かう。最初の関門は、モンゴル税関。一〇時の開門を待つトラックがゲートの前に何台も列んでいる。税関副所長を擁するわが三台のタクシーは、対向車線を進みゲート前の先頭に並んだ。いつの間にかオフィスの制服に着替えたスイカ腹おばさんが凛々しく事務を執っている。開門と同時に先頭で通関できた。ここまでの順調な運びは、スイカ腹おばさんの力が与って大きかったと言ってよいだろう。実は、彼女がまだスッキリと痩せていた頃、中国出張時の面倒を見ていたのがバートルだとか。それが今モノを言ったというわけだ。

税関を過ぎると次は出国審査。外に出ないように言われてジープの中で待機していた私には状況はよく掴めなかったが、やはり出国手続きが難航しているようだ。あとで聞いた話だが、長い押し問答の末、バートルが東京のモンゴル副大使に電話をかけ、目の前の出国審査官と直接話をさせた。どうやら審査官は副大使に一喝されたようである。直ちにビザに出国許可印が押され、一人あたり三三USドルを要求されていた通行税（？）も一挙に一〇中国元に値下がりした。限りなくまいないに近いこの支払いに、印刷した領収書が出されたのには驚いた。時間はかかったが、東京からの電話一本でモンゴル西端の出口から脱出できたことに、副大使に感謝しなければならない。

次は中国への入国手続きである。旅券審査にいったい何をやっているのだろうと思うくらい時間をかけている。その間窓口の外の長蛇の列が炎天下で根気よく待っている。この広い草原の丘陵にいくつかの出入国管理オフィスの建物があるが、通行人の入ることができる建物はない。雨が降ったらどうなるのだろうと思う。

中国側での荷物検査は二度も三度もあった。車に積んである大きな荷物をいくつも開けさせ。まるで嫌がらせか、賄の請求の暗示かと思うばかりである。やっと入国できたのは、すでに一二時三〇分を過ぎていた。

三台のタクシーは、モンゴルでは市街地にしかなかった舗装道路を水を得た魚のようにマイクロバスの待つタクシクァンへと飛ばし始めた。ところが、私の乗っているジープの調子がどうもおかしい。ついに路肩へ寄って止まってしまった。何のことはない、ガス欠である。だいたい、国境を越えて隣国まで客を運ぶというのに、事前にガソリンの点検もしないのか。幸い先頭を走っていたので追いついた後続車の燃料タンクのドレインからコップに三杯ほど抜いてジープの方へ給油してくれた。近くで拾ったガラス瓶を割って漏斗代わりにしていた。ふたたびエンジンがかかったとき、ロシア製ジープの燃料計はたったコップ三杯の給油なのに完全に振り切れた。

ガス欠そのものは笑ってすませられる事件だったが、このために浪費した一〇分あまりのために、タクシクァンの交通管理事務所到着が午後一時を数分過ぎてしまった。ここでモンゴルのタクシーはわれわれ乗客と荷物を運んできて降ろしたという証明を貰わないと、モンゴルへ再入国つまり帰国できないのだ。しかし数分の差で事務所の昼休みにかかってしまった。新彊を走るマイクロバスを目の前にして、事務所の昼休みが終わる四時まで約三時間、なす事もなく待たねばならないことになってしまったのである。

しかし、何はともあれ無事に中国内に入れたという安堵感がみんなの気持ちを明るくしていることは確かだ。食べ物は旨いし、道路は整備されているし、目に入る文字は漢字だ。

「炎天下であのハミ瓜を思い切り立ち食いするぞ」と心に決めて、私にとっては五度目の新彊の旅がスタートした。

「高地文明」への旅

斎藤清明

もとの京大演習林（いまは京大フィールド科学研究教育センター）上賀茂試験地の一角に、総合地球環境学研究所（略称、地球研）が新築移転して二年余になる。この地球研は、民博や歴博、日文研などとともに大学共同利用機関法人・人間文化研究機構を構成する研究機関で、「地球環境問題の解決に向けた学問の創出のための総合的な研究」をおこなうべく二〇〇一年に創設され、研究プロジェクト方式で共同研究を展開している。

二〇〇七年度には一四本の研究プロジェクト（五年計画）とプレリサーチ（一年間）三本が走っているが、そのなかにＡＡＣＫ会員が加わっているのもある。その研究計画は、プレリサーチの「人の生老病死と高所環境」という。高地における人間の生き方と自然および社会経済環境との関連を、ヒマラヤ・チベットやアンデス地域などで調べようというものである。

「高地文明」

「高地文明」といっても、おおかたの方には聞きなれない言葉であろう。というのも、この研究チームが、おそらく初めて打ち出した仮説なのだから。

これまで、文明といえば、古代の四大文明といわれるエジプト、メソポタミア、インダス、中国というように、大河の流域で生まれたことがよく知られている。しかし、環境に注目して世界を見てみると、高地で生まれた文明といえるものがいくつもある。

例えば、アンデス文明。インカ帝国の中心だったクスコは標高約三四〇〇ｍの高地であり、数十万人の人口を擁していたという。チベット文明もある。その都ラサは標高三六五〇ｍである。一七世紀以降のダライ・ラマ政権はよく知られているし、古代チベット王朝もラサから近いヤルルン谷に興っている。また、エチオピア高地は標高二〇〇〇～三〇〇〇ｍあり、紀元一世紀頃から、都を移しながら、王国が続いてきた。さらに、メキシコの標高二〇〇〇ｍ余りの中央高原でもテオティワカン文明が興っており、アステカ文明もある。

これら、熱帯や亜熱帯の高地という環境で生まれた文明について、ＡＡＣＫ会員の山本紀夫氏（国立民族学博物館名誉教授）が、はやくから注目している（山本紀夫著『雲の上で暮らす―アンデス・ヒマラヤ高地民族の世界』二〇〇六）。彼はアンデスやヒマラヤなどの山岳地域における長年の研究調査によって二〇〇六年度の秩父宮記念山岳賞も受賞しており、この研究チームの中心メンバーである。

共同研究を始めるにあたって、メンバー全体で現地を見ておこうと、研究プロジェクト・リーダーの奥宮清人（地球研・准教授）と山本紀夫、斎藤清明（地球研）、河合明宣（放送大）、松林公蔵（京大）、竹田晋也（同）、月原敏博（福井大）、石根昌幸（京大。以上、ＡＡＣＫ）、稲村哲也（愛知県立大）、加藤真（京大）、安藤和雄（同）の研究メンバーが、二〇〇七年末から正月にかけて、メキシコとペルーを訪れた。このうち、山本、稲村の両氏はアンデス研究の専門家だが、他のものはほとんどが初めてのアンデス行だった（松林、石根の両氏はボリビアで医学調査の経験がある）。この稿では、その概要を記しておきたい。

メキシコにて

一二月二三日、成田発アメリカン航空機でロサンゼルスへ。ロスでアエロメヒコ航空に乗り継ぎ、メキシコシティ着。ここで二泊し、

テオティワカン「太陽の神殿」

テオティワカン遺跡などを見る。

テオティワカンはメキシコ市の北東約五〇キロにある。ラテンアメリカ最大といわれる都市遺跡で、ユネスコ世界遺産に登録されている。訪れてみて、やはり高さ六五mの「太陽の神殿」や同四二mの「月の神殿」など、巨大なピラミッド状の祭祀センターには圧倒されるおもいがした。テオティワカンは紀元前二世紀ごろから建造され、八世紀ごろに滅びたといわれるが、最盛期（三～六世紀）には二十万人もの人口を擁していたという。標高二二〇〇mのメキシコ中央高原において、当時のローマにも匹敵する世界的な大都市として繁栄したのである。

標高二二四〇mの現在のメキシコ市も、一四世紀から一六世紀にかけてのアステカ文明のころには湖上に浮かぶ都市だった。スペインの侵略を受けた後、その中心地にあった神殿や宮殿が壊され、その石材などでスペイン風の市街地がつくられた。湖も埋め立てられて大都市になったが、現在のメキシコ市南郊のソチルコを訪れると、かっての名残りの水路を見ることができる。そこには、浅い湖沼の区画を木杭などで囲い、水草や泥土で積み上げて造成した耕作地も広がっていた。チナンパと呼ばれる灌漑農業がおこなわれ、アステカ王国を支えていた。今日では世界遺産にも登録され、観光地になっている。手漕ぎの遊覧船でまわっていると、マリアッチ楽団を乗せて楽しむ地元の行楽客とすれちがい、交歓した。

だが、メキシコ市の都市問題はたいへんだ。人口の集中は二〇世紀後半からはげしくなり、その都市圏は二〇〇〇万人を越える。大気汚染など環境の悪化が問題になり、近年はかなり対策が講じられているというが、近郊に広がるプエブロ・ホーベン（若い町）と呼ばれる、まるでスラムのような住宅密集の状況はすざまじい。

そのように変貌はげしいメキシコ市近郊だが、山本氏の案内でトウモロコシの野生種を見つけることができた。幹線道路わきの空き地に生えているのだ。すぐ近くには収穫の終わったトウモロコシの茎が積み上げられていたが、うっかり見逃してしまいそうなところだった。

ペルーへ

二五日夕、メキシコシティからアメリカン航空でマイアミ経由でリマに向かったが、マイアミではロサンゼルスで受けたのと同様に、合衆国当局の厳しい出入国検査にあった。メンバーの一人の預けたトランクが、キーを壊されて調べられていた。

ペルーの首都リマでは、日系人のペンションにお世話になる。山本氏らの定宿である。そして、リマの天野博物館の協力を得て四輪駆動車をチャーター。長駆して、ペルー各地に向かうことになった。

天野博物館は、故天野芳太郎氏（一八九八～一九八二）が一九六四年に設立し、とくにチャンカイ文化の研究で知られる。その協力を得られたのは、山本氏らの長年の付き合いのおかげだ。

ペルーの最高峰ワスカラン

リマでは天野博物館や国立考古人類・歴史博物館をじっくりと見学。日本人ペルー移住史資料館（日秘文化会館内にある）も訪れた。また、アンデス登山にきたのが縁で在住している、もと日本人登山家（今は貿易商）宅を訪ねて懇談した。

ワスカランとチャビン・デ・ワンタル

二八日早朝、リマを出発。ハイエースとランドクルーザー「プラド」（いずれもトヨタ）に分乗し、約四〇〇キロ北部の都市ワラスに向かった。そこは、ペルーの最高峰ワスカラン（六七六八m）の山麓にあたる高地である。

海岸に沿って北上する。かなりのスピード

で飛ばせるハイウェイが続く。リマ郊外の荒れ地のようなところにもプエブロ・ホーベン（若い町）が広がっている。そこを過ぎると、砂地の乾燥地帯になる。まるで砂漠のようだ。そんな道路脇で、ジャガイモの野生種を山本氏が見つけてくれた。紫の花が鮮やか。タバコの野生種もあった。

海辺のレストランで昼食（ペルーは海産物が豊かで、おいしい）後、ハイウェイから分かれて東に向かう。道は海岸から一気に内陸部に上がっていく。途中、トマトの野生種も見つけた。上るにつれて、霧がよくかかるようになり、肌寒くなった。すっかり日が暮れて、ワラス着。街角には、フェルト帽にスカート姿の民族衣装の女性が（娘さんは少ないが）よく目立つ。

チャビン・デ・ワンタル遺跡

翌朝、晴れた。夜明けとともに、まず陽がワスカランの頂に当たり、赤く輝く。北方にかなり離れているが、さすがに大きい。続いて手前のHaalcan（六一二五m）やCopa（六一八八m）の鋭鋒にも当たる。

この時季にワスカランがよく見えるのは珍しいそうだ。朝市が真っ最中の市街地を抜け、ワスカラン国立公園に向かう。北へ車を走らせと、ワスカランの山容ががぐんぐんと近づいてくる。ユンカイの町を過ぎ、国立公園の入口ゲートに一〇時着。一九七〇年の大地震のときにワスカランが雪崩を引き起こして町を埋め、約二万人が犠牲になったそうだ。その追悼の白い大きなキリスト像が立っている。

ゲートは渓谷にあって、間もなく美しい湖が現れた。標高三八五〇mにある、氷河湖のヤンガヌコ。観光客もほとんどいないが、世界遺産である。道はさらに四七五〇mの峠へ、つづら折りに上がっていく。湖はもちろんワスカランの氷河も見下ろすようになる。この高度になると、天気が急変し、氷雪に見舞われた。峠は切り通しで、向こう側はアマゾンの源流である。ここで引き返す。

私は峠の途中から耳鳴りがひどくなった。ワラスのホテルに戻っても、治らない。それでも、松林ドクターはじめ、この隊には三人も医者がいるので安心だった。ダイアモックスを半錠のむ。

三〇日。ワラスからリマに戻る途中に、チャビン・デ・ワンタル遺跡に立ち寄った。紀元前一〇〇〇年頃に造られたという、プレ・インカの代表的な遺跡である。アンデスを越え、アマゾン側にすこし下った、緑豊かなところ。標高三一八〇mの高地にある。神殿は地下にあり、迷路のようだった。リマの日本大使公邸人質事件の際、地下道を掘ってゲリラを皆殺しにした「チャビン・デ・ワンタル作戦」でも有名になったのだが、もとの現地は平和な宗教都市だったはず。

クスコへ

大晦日はリマで過ごす。日系人宅に招かれたり、夜はリマでは有名な寿司店へ。日本料理がなかなかの人気だ。零時になると、あちこちで花火が上がった。新年を迎え、お祭りのよう。

元旦。雑煮をいただき、ゆっくりと昼過ぎに出発。かってのインカの都クスコを目指す。この日はナスカまで走り、着いたのは夜中だった。途中、今夏に地震に見舞われたピスコに立ち寄った。ミサの最中に崩壊して多くの犠牲者を出した教会が、側壁を残して立っていた。痛々しい。

二日。朝一番にナスカ空港に行き、地上絵の遊覧飛行。四十五分コースで一人六十ドル。ナスカの地上絵はさまざまに解釈されているが、農耕儀礼という見方が有力だそうだ。空からは絵よりも直線が、よく目立った。帰路の飛行コースで灌漑水路も見えた。古代から使用されているものだという。

ナスカからパン・アメリカン・ハイウェイ

と分かれる。クスコへの道は東へ。高地へ上がっていく。いつの間にか標高は三〇〇〇mを越えている。もう、リャマやアルパカ（この二種は家畜化されている）、ビクーニャとグワナコ（この二種は野生）の世界となる（ラクダ科動物はアンデスにこの四種がいるが、旧大陸には二種のラクダだけ）。インカ帝国時代のビクーニャ追い込み猟が復活したことなど、稲村氏のレクチャーを聞く。

アバンカイで一泊し、三日昼過ぎ、クスコ着。夕方、全員がそろい、これまでの旅の感想などを語り合い、今後の研究打合せ。

標高約三四〇〇mの都市クスコ。中心部にあるサント・ドミンゴ教会は、インカの「太陽の神殿」を壊して建てられたが、土台はインカそのもの。石組みの美しさには、息をのむおもいだ。街のあちこちで、インカを土台にしてスペイン風に建て替えられたさまを想像した。侵略者のおもいのままに。

市街地を見下ろす丘にあるサクサイワマン遺跡。巨石を組んだ、インカの要塞跡である。スペイン軍に反旗を翻したインカ軍が籠もったが破れたところ。ここで、毎年六月二四日に「太陽の祭り」が催される。多くの観光客でにぎわうが、インカの末裔にとってなんとも皮肉なことのようにおもえる。

マチュピチュ

クスコ郊外の「聖なる谷」のピサックなども訪れたが、やはり「空中都市」「失われた都市」と表現されるマチュピチュは見のがせないところ。世界遺産として、アンデス文明の真髄とされているのだから。

五日早朝、クスコのサン・ペドロ駅からマチュピチュ行き列車「バックパッカー」に乗車。ウルバンバ川に沿って下流に向かい、昼前にマチュピチュの麓の駅に着き、バスに乗り換える。急斜面を上ると、目の前に石造りの「みやこ」が現われた。

標高約二四〇〇m。そう高いところではないが、緑濃い山々に囲まれ、秘境のたたずま

サント・ドミンゴ教会

サクサイワマン遺跡

マチュピチュ遺跡

いだ。四時間ほどしか見学の余裕はなかったが、遺跡を丹念に見て回り、インカ道も断崖で行き止まりのところまで歩いた。

クスコはじめインカの各地の都市は、ことごとくスペインに破壊されたが、マチュピチュはその存在を知られず、奇跡的に残ったという。断崖の上に、草木に覆われたまま、二〇世紀になるまで。

インカの人々はスペインが侵略してきた当初はここに籠もっていたのだろう。やがて、この「みやこ」を捨て、安住の地を求めてアマゾンの源流域へ下っていったのかもしれない。それとも、ここで絶えてしまったのか。きっと、そうにちがいない。そのような「滅びの美学」を想像してしまう、マチュピチュ遺跡の哀しさ。午後一〇時過ぎ、列車でクスコに帰着。

六日、クスコからティティカカ湖畔のプーノへ。四六〇〇mの峠も越える。

七日、富士山に似たミスティ山（五八二五m）を遠望し、世界遺産の町アキレパには寄らずに、一気に海岸まで下る。

八日、ナスカを経てパン・アメリカン・ハイウェイを飛ばし、夕方、リマに戻った。ここまでの走行距離は四〇〇〇キロを越えた。

九日、天野博物館が発掘中のシクラス遺跡を見学。リマの北約一〇〇キロにあり、約四八〇〇年前の神殿。ペルーでは最古の遺跡でないかと注目されている。夕方、国立サン・マルクス大学を訪れ、医学部長と懇談。今後の共同調査などを話合う。そして、深夜のアメリカン航空で帰途についた。

これから「高地文明」研究は、人はなぜ高地に棲むようになったのか、どのように適応したのか、いかにして文明をつくったのかなど、高地という環境と人間とのあいだの関係を、おもに生業を通して明らかにしていきたいと、わたしたちは考えている。

AACK人物抄
宮木靖雅（続）

平井一正

前回は彼がヴィンソン・マッシーフで夢敗れ、そのパイオニアワークにかけるエネルギーがマグマとなって吹き出そうとする経緯を書いた。今回はマグマとなった彼の情熱が、悲劇に終わったその後の彼の軌跡を書こう。少々長くなるが、貴重な記録なので、蒐集した資料を、なるべくカットなしに書きたい。

五、北極探検へ

東海大学のカナダ北極圏調査計画は、六七年の東海大第三次ネパール探検隊に参加した学生達が設立した、東海大学探検学会から計画が生まれた。そして対象分野を北極圏として、学内に極地研究会を発足させた。学生から相談を受けた宮木は、極地の探検は一過性のことではなく、継続してやるべきであるとし、五カ年計画を誕生させた。

七〇～七五年五カ年計画の計画書を見ると、主催は東海大北極委員会、後援は日本極地研究振興会である。詳細な計画進行状況があり、北極委員会の主たる委員のリストには足利惇氏学長を委員長とし、工学部や理学部教授などが名を連ね、学生代表も委員になっている。大学を巻き込むこの格好に持っていったのが宮木である。彼は当時の松前総長、足利学長ら理事、教授達の前で、この調査隊を将来的には昭和基地にも匹敵する、あるいはそれ以上の北方研究所として、若者が活躍できるものに育て上げたいと堂々とぶち上げた。そしてその結果、北極探検は東海大の全面的にとりあげるところとなったのである。

どのようにして、関東で、しかも出身大学でない土俵でこの組織作りをしたか、もし彼が生きておれば、きっと「そりゃおまえ、しんどかったぞ」と笑いながら言ったであろう。

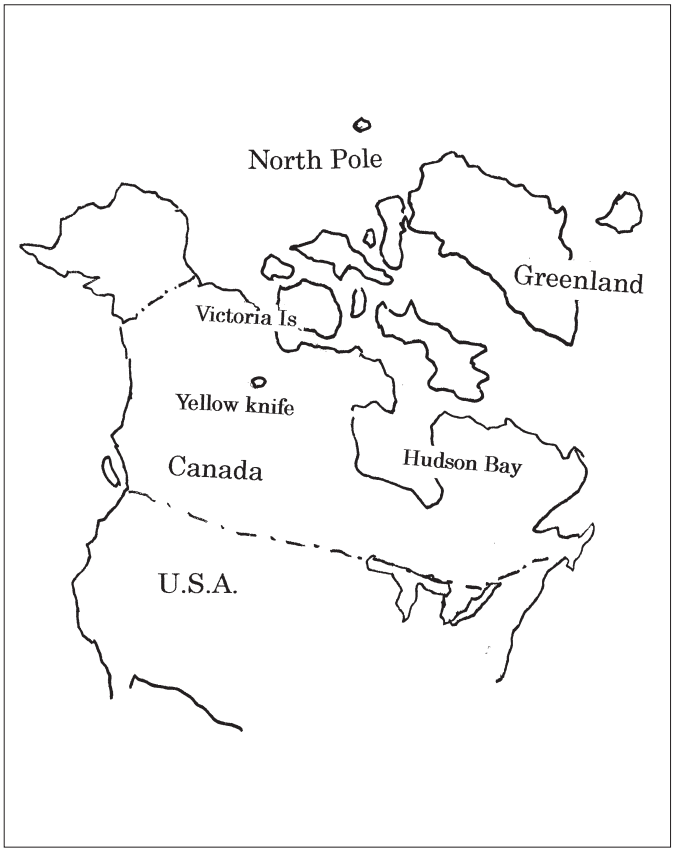
この体制があり、その委員として駒林栄太郎教授、加藤愛雄教授がいたおかげで、後に捜索活動ができた。またその後宇宙線観測のため東海大学とマギール大学の共同研究が三年間ほどつづくことにもなった。

七〇年から七一年の第一次隊は基礎調査では、イヌイット部落に住み着いて現地事情を調査することも含まれていた。第一次隊の行動隊長は宮本千晴であった。

第一次隊の調査に基づいて第二次隊が七一～七二年に予定され、カナダ北極圏の中央部であるビクトリア島、ケンブリッジベイ（N.69, W.105）を中心とした地域、およびバッフィン島北西部を調査地域として、地磁

気の研究、北極海の音響特性、イヌイット社会の民族学的研究などを行うことを計画していた。総隊長駒林工学部教授（六七歳）、隊長加藤工学部教授（六五歳）に次いで、行動隊長として宮木（三〇歳）が参加する。そして宮木以下、吉谷（二六歳）、杉田（二五歳）、中庭（二三歳）、菅野（二二歳）、磯野（二一歳）の五人の若者が隊員である。このうち杉田と中庭は六七年のネパール隊隊員であった。磯野は第一次隊隊員であり、そのまま越冬していて現地の人と交友を深めていた。

計画書には、宮木の肩書きとして東海大学非常勤講師、同大学極地研究会顧問、日本極地研究振興会会員とある。



六、遭難（文献六～八）

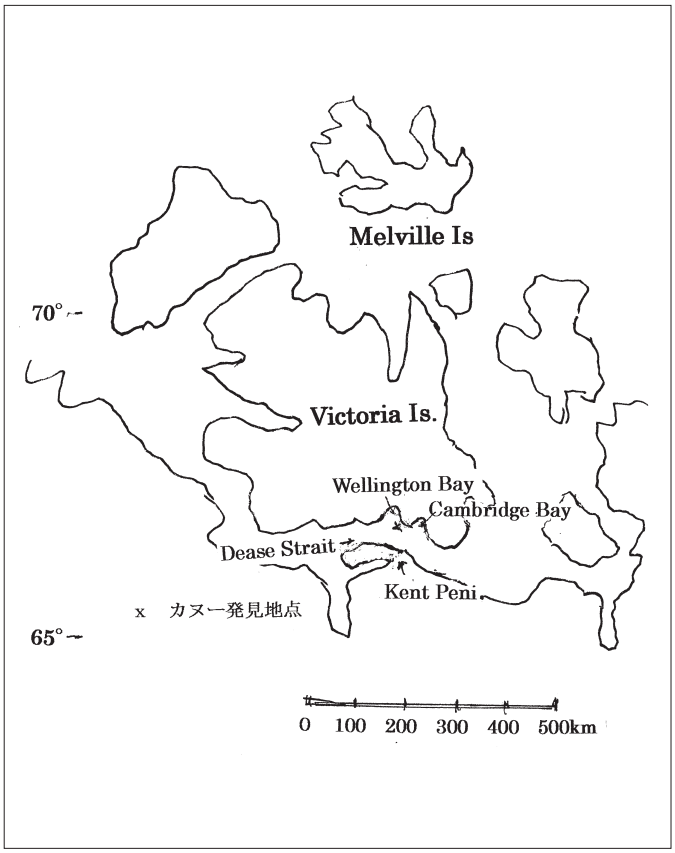
宮木らは七一年四月三〇日、ケンブリッジベイに到着、種々な準備活動を行い、そして七月二〇日、宮木、中庭、磯野の三人で、長さ一八ft、幅一mのカヌーで、ビクトリア島内陸横断旅行（ウエリントンベイからハードリーベイまで往復一〇〇〇km）にケンブリッジベイを出発、六〇日の予定で調査にでかけた。

このカヌーは手製の発泡スチロール製アウトリガーを両側から突き出す形に付けたもので、船首船尾ともに尖ったタイプ（ボース・エンデッド）の木製カナディアン・カヌーである。隊が検討し発注したのは同じ一八ftカヌーであったが、地元のイヌイットたちが海で使っていたフラット・スターン、ワイドタイプのカヌーである。これなら積載量は二倍以上あった。しかし途中どういう事故があったのか、出荷後一カ月も迷子になり、出発直前に届いたカヌーはボース・エンデッドになっていたということである。

（この水陸両用の、リヤカーとカヌーを組み合わせたような形のアイデアは、田河水泡の冒険ダン吉のマンガから得たと、宮木は自慢していた。）

彼が加納一郎さんに出した手紙の中で次のように述べている。（文献七）

「夏のもうひとつの予定として、小生他二



人の隊員でビクトリア島内部に奥深く入り、湖や川を小型のカヌーを利用して、できれば横断し、ハードリーベイまで達したいと思っています。比較的知られていない、雪のない北極の内陸の旅は、何か面白いものがつかめると思っています。（中略）非力にして浅学の身をもってしては、料理しきれない広大さと怖さをこの地はもっていますが、小生なりにベストを尽くして、ともかく曲がりなりにも探検の王道を求め、はずさないようにベストを尽くしていくつもりです。」

八月二日、イヌイットがグラベルビット海岸で宮木の赤いナップザックを発見した。そしてハードリーベイに宮木らが到着しているかどうかを確かめたが、未到着という。関係者が心配していたところ、九月一八日に民間機がケンブリッジベイの西方一八kmのディース海岸にカヌーが打ち上げられているのを発見した。パイロットが着水し、遺留品が発見され、遭難が確実になった。イヌイット生協の用事で飛んだ現地の友人が、帰途皆が心配していることから、予定コースをチェックしてくれたものである。（宮木も磯野も現地には、親友や家族のように思ってくれる人たちが何人もいた）。

九月一九日には東海大に対策本部が設置され、捜索の結果、隊員のリュックサックやエンジンなどが発見され、遭難したことが確実となった。九月二一日には日本の新聞各紙は東海大調査隊三人が行方不明と大きく報じた。

横断隊はまずキャンプ北の湖を伝って西に川のあるところまでいく予定であったが、折悪しく北風が吹き、湖の南岸に開いていた水路が流氷で塞がっており、代わりに海峡の北岸（島の南岸）沿いに海氷の隙間が開いていた。それで急遽予定コースを変更して、海路を行くことになったと推測される。そしてそこを横断中、横風を受けて転覆したらしい。因みに宮木は一mも泳げない金槌だったが、氷点下の海水中に転落したら生存は無理であったと思う。

宮木ら三人は現地の人に愛されていて、現地の人は男も女も、酔うたびに残った隊員をつかまえて声をあげて泣き、自らを責めたという。

七、捜索活動（宮本千晴氏からの情報により詳細な年譜が明らかになった）

捜索活動はいくつもの段階で行われた。

最初は地元の友人たちによる私的な捜索で、壊れたカヌーが見つかった。それが最初の捜索で、第二段階の捜索は大学の指揮によるものであった。北極委員会委員で隊長の加藤教授が責任者となり、九月二八日にケンブリッジベイに入り、現地の警察に捜索を依頼した。これに対して、警官を中心に、地元の友人・知人たちが大勢走り回って、予定コース沿いの地域を中心に、生存ないし遺体発見の可能性があると思われるところを、地上と空から調べてくれた。そして現地の警察と友人たちは生存の可能性なしと判断した。

その過程で、一〇月五日付け朝日新聞は、九月一九日にケンブリッジベイからディース海峡を経て南側約四〇kmの対岸ケント半島北東部で煙があがっているのを、ケンブリッジベイ近くのイヌイットが目撃、三人が生存している可能性があると報道し、東海大対策本部は捜索に全力をあげると報じた。西堀は衣服やストーブが見つかっていないので、彼らはどこかで生存しているのではないかという談を発表した（夕刊フジ、一一月一四日）。

そういう報道から三人の生存の可能性を否定しきれなくなり、大学による捜索をまだ打ち切らせないようにした。しかし一一月三日に現地警察からカナダの日本大使館を通じて、東海大学遭難対策本部に公電が届き、捜索打ち切りを告げ、また大学としても事実上捜索打ち切りとした。これが第三段階である。

宮本千晴は、捜索の第四段階として、遭難した三人の家族の要請を受けて、七二年五月からケンブリッジベイに入り、大学の捜索活動とは別立てで、生きているとしたら、こういうシナリオしか考えられないと思われる諸地域を、走り回った。しかし、何も見つけられなかった。伊藤尤士（第三次隊隊長予定）と共に、スノーモービルで、煙のあがったというケント半島一帯も捜索した、そして六月には生存の可能性なしと結論した。

一方大学も同年六月から、生存の可能性追求というより、あの海のどこで何が起こったのかを究明するための調査チームを派遣し、遭難したと思われる海の中の調査を二カ月やってくれた。

しかしその後も、一次隊の隊員であった街道憲久は何度も現地を訪れ、夫人と幼児を連

れてイヌイットの家族とキャンプで越冬生活をしたり、家族たちも現地を訪問している。そうした交流があるために、何か証拠になるものが見つからないかという私的な捜索的散策が折に触れて行われた。

一九七三年七月、駒林教授、宮木父、同昌代夫人、中庭、磯野両隊員の父など関係者がケンブリッジベイに行き、カヌー発見地点に慰霊碑を建立した。

八、遺骨発見

一九七三年一〇月七日、アザラシ狩りのイヌイットが、ケンブリッジ湾内のケープコーボン付近の小島で大腿部白骨を発見、遺留品のアノラックとベルトで宮木の骨と確認された。そして七四年にエドモントンで火葬にされたあと、帰国した。七四年夏には、中庭の白骨化した頭部とセイコーの自動巻時計が発見された。遭難者のひとり磯野だけは未だ見つかっていない。

宮木が無言の帰国をした後、追悼式が行われたという記憶はないが、一九七三年はヤルンカンで松田隆雄が遭難死した年でもあり、そういうことも重なって行われなかったのかもしれない。

九、遭難の検討（文献八）

会員安田武（故人）は、東海大の資料、東レの人事部から借用した貴重な社内記録のコピーなどを集めて、四センチの厚さの記録集を製本した。この記録集には、遭難以後の東海大、東レ、家族間の応対について詳細な文書のやりとりがあるが、ここでは公表を差し控えたい。あくまでも捜索続行を主張した家族と、捜索打ち切りを希望した大学側とのやりとり、大学や東レの事後処理の対応などを読むと、複雑な思いにかられる。東レはあくまでも宮木に好意的に処置をしてくれた。これは東レの社長が「アホがいなければ会社は伸びん」といったことに通じるものがある。

安田は遭難後エドモントンの日本大使館で大使に会い、遭難したカヌーは大使自身が宮木の依頼でエドモントンのマーケットで買って送ったのだが、あれは川舟で海には無理だと注意したことなどを聞いている。安田は宮木と「極地での繊維の暴露テスト」の共同研究を計画し、テスト試片を用意した。遭難後この試片がケンブリッジベイの無線鉄塔にセットされていることが安田により発見された。

なぜ遭難したのかをめぐって、七二年一月二五、三〇日、同一一月二六日の三回にわたって、宮本、街道ら関係者がいろいろな観点から討論をしている。それは四〇〇字詰め原稿用紙一二〇枚にわたる詳しいもので、それを宮本千晴がまとめている。

「木の葉型一八ftのカヌーを使用しているが、アウトリガーをつけても安定性がわるいカヌー、最大積載量すれすれの荷物、昨年と様相の変わっている海、伴走船をつけなかった過信、極地になれたという錯覚と相手（海）を知らなかったこと、カヌーの知識や経験もなく、ぶっつけ本番であったこと」、など批判がなされた。

しかし一方次のような反省と宮木に対する賛辞がある。

「・・・この計画は一体誰のものなのか、誰が誰のためにそれをやっているのか混乱してしまった。主人公である極地研究会の弱さを、あの手この手で補うとして、それが全部中途半端で、いっそう主体性をあいまいにしてしまった。

学生達はリーダを外に求めた。そして計画の提案をうけて受けて立ったリーダに、どうやって隊をだすか、という出発点からイニシャティブをゆだねた。しかし外部からのリーダにはどうしても越えられない限界がある。行きたい、何かやりたい、という学生たちの意思を前提にして、それを実現するための技術上のリードを依頼されたにすぎないからである。・・・本質的に代理人にすぎない雇われのリーダの肩に何から何までイニシャティブをとる責任がかかってきた。そうしなければ何も進まない。・・・それにしてもこういう条件の隊を率いて、あれだけの仕事をさせ、育て上げた宮木のリーダとしての手腕と努力は敬服せざるを得ない。その宮木にして、やはりすべてに余裕がないことに敗れた。わずか半年の間に大学を引き込み、組織を作り、隊編成、資金作り、装備調達、梱包、トレーニングなどを、寄せ集め、他人の土壌、という条件でやった宮木はすごいという他はない」。

（宮木が関西で会社勤めであるという環境を考えると、その困難は想像もつかないものがあったと思う。それをはねかえして実現ま

でもっていった宮木の努力は賞賛してもしきれないものがある。）

一〇、山仲間の回顧

宮木は人望があり、多くの山仲間に好かれていた。その仲間のうちのひとり笹谷哲也は語る。

「トクが遠征に出かける最後の晩に二人で飲んだ。『べべちゃん（笹谷の愛称）、今度は帰れそうにない、とくにメンバーが弱いし、京都の連中はのってくれない』、と泣きながらこぼしていた。私は『気楽に行けよ、遭難したらお墓詣りにいってやる』、といって、朝方まで一緒にいて、別れたのが最後だった。」

約束通り笹谷は、九〇年七月にケンブリッジベイにお墓詣りに行った。「遺族と大学が作った約二mの立派な碑が流氷の浮かぶ北の海に向かって建てられていた。当時は三勇士の碑として飛行機会社のパンフレットにも出ていた。ここでトクは旅行の準備中に白熊を七頭もしとめたと手紙で報告をくれた。」

宮木は多才であった。馬術もできたし、ダンスもうまかった。インドラサンのときに香港に立ち寄ったとき、当時香港にきていたミュージックの女王といわれたアンジェラ浅丘とナイトクラブでタンゴ、ルンバと踊り狂い、その迫力と技に、並び居る白人たちが踊るのをやめて拍手喝采した、と当時香港にいた笹谷が述懐している。

六三年か六四年頃、シンクタンクという言葉が流行った頃、宮木は、シンクはできないが、アクト（act）はできる若者を集め、アクトタンクという組織を作った。丹後半島の廃屋を借りて訓練をしていた。この構想をさらに具体化するために向後と再会したのである。

仲のよかった安原啓示は語る。

「地下鉄虎ノ門線新橋ホームでバッタリと出会い、「明日行ってくるわ」「泳げへんのに大丈夫か？」「会社の防寒衣新製品を使うから大丈夫や」・・・訳のわからん会話を交わしたのが、トクとの最後だった。

人怖じせず、物怖じせず、「そんなもん止めとけ」といったのに、好きになった彼女とダンス競技にのめり込んでいった。ダンスなんて好きな人とより親密になるためのものと思い込んでいた俺たちの間違いであった。

インドラサンの帰り、一人でネパールを歩いた時の土産、小さなククリが我が家にある。使っていた本物のククリは、サイドに突っ込んでいたため没収され、僕用の土産はシュラフに包んでいたため持ち帰れたと言っていた。

ずーっと、夢と自由と愛を求め続けた、充実した生涯だったと追憶している。」

同じ山仲間の吉野熙道は語る、「彼のすばらしいところは、カリカリせずにニコニコと、それでいていつのまにか抜群の実行力を発揮して、計画を実現してしまうことでした。生きていたら一体どれほどのことをやり遂げたかと思うと、本当に残念です」

行動力に富み、誰からも好感をもたれ、無限の可能性をもっていた宮木の死は返す返すも惜しまれてならない。

一一、付記

一九九二年六月、ケンブリッジベイから北のアクセルハイベルグ島で、名古屋大とカナダのアルバータ大の合同発掘調査（樹木の化石発掘）が行われたが、そこに参加した会員斎藤清明は、宮木をしのんで毎日新聞日曜版（九二・一一・五）に、次のような記事を書いている。参考までにその抜粋を紹介しよう。

「氷海上を飛びながら、この氷の上を犬ソリで駆けていった植村さんの雄姿と、その数年前に北極海に消えた日本人探検家の後ろ姿がダブって思いにふけった。二〇年前に北極海に沈んでしまった探検家は、実は私の大学山岳部の先輩である。彼は学生時代にヒマラヤの未踏峰に果敢な挑戦をして成功、大手繊維会社に勤めた後もますますアドベンチャー精神を燃やしていたが、三〇歳での遭難死。

植村さんと同年齢だった。親交もあり、同じように南極の最高峰ビンソンマシフに憧れたが、ついに二人とも登頂を果たせなかった。第一次南極越冬隊長の西堀栄三郎さんも二人の極地行への情熱にほだされ、親身になって応援していたのも思い出す。

機影に彼と植村さんの姿が重なってくるのだが、それにしても、植村さんと仲のよかった山男が次々に消えていくことか。最後の山マッキンレーでも植村さんの遭難五年後に、当時日本最強といわれた登山家たちも烈風に吹き飛ばされた。植村さんとエベレスト登山で共に越冬した私の友人も中国で遭難してし

まった。なんという運命のめぐりあわせだろう。」

なおケンブリッジベイは、植村直巳がグリーンランドからアラスカまで単独犬ゾリ旅行をしたときに、氷海が融けたために一夏越夏した土地である。宮木が遭難したのは、植村が犬ゾリで訪れる四年前である。

一二、謝辞

本稿をまとめるに当たって、宮木の同志である向後元彦氏、宮本千晴氏、街道憲久氏からはヴィンソン・マッシーフ計画、その後のネパール調査、さらに北極探検計画と捜索に関する詳細な貴重な情報をいただいた。また笹谷哲也会員など多くの会員からも貴重な情報をよせていただいた。竹田晋也会員は行方不明になっていた安田武会員の遭難記録を発見してくれた。酒井敏明、田中二郎会員から写真の提供を受けた。以上の諸氏に感謝する。

文献（前号に続く）

六、宮本他：極北の荒野の中に、あるくみるきく、1974, 4, No.86
七、宮本：東海大カナダ北極圏調査計画70-75の仮報告、宮本氏提供
八、街道憲久氏提供資料
九、安田武編：宮木靖雅氏遭難記録

宮木は六七年、ネパールの踏査の後、西アジアを踏査したが、その時の記録の一部が左記の文献にあることが分かった（木村雅昭会員からの情報）。夫人とふたりでカイバー峠をこえ、アフガン北辺の地をたずねたときの随想である。

一〇、宮木靖雅：西アジア高原の旅（随想二題）、西域探検紀行全集、第四巻月報
一二、六八年、白水社

おわりに

今回の宮木の人物抄は、たまたま笹ヶ峰会の情報ネットで、インドラサンに関する話があり、それから派生して、彼がなぜ東海大と関係をもったのかという疑問をもったのがきっかけです。幸いにして多くの方から貴重な情報を提供していただき、感謝にたえません。おかげで不世出な登山家であり、探検家であった宮木の生涯を紹介できたことを喜んでおります。

訂正（前回分）

一、神原達氏（当時外務官研修生）
　↓　神原達氏（外務省特別研究員）
（13頁3段目左から3行目）
二、ナイチェ村の祭りは　アルゲン　ではなく　アルグン
（14頁1段目1行目）

白神山地にひとり遊ぶ

荻野和彦

なぜこの山行を計画したか

本州の北端近く、秋田県と青森県にまたがる、ブナの自然林におおわれた山域が白神山地である。ブナを伐って森林を開発するために秋田県から青森県に通じる青秋林道計画が一九八一年に承認されたが、一九九〇年、県境尾根に達したとき工事はストップした。地元の強い反対の声に耳を傾けた北村青森県知事（当時）が決断したのである。この山域は一九九三年に世界遺産に登録された。開発の推進者が一転して自然保護をかざす管理者となった。厳しい入山規制が掛けられ、マダギ小屋はとりこわさねばならなくなり、地元民は漁業権を放棄させられた。

山はほんとうに人が近づくことを拒んでいるのだろうか。自然を守るために人を排除しなければならないのか。数年前からいろいろな季節に白神山地への山行を計画してきた。今回は、そんな自分の白神遍歴のひとこまとして、雪の白神岳から二つ森までを歩いてみようと思った。弘前市の根深誠さんや津軽三人衆の竹越恵蔵さん、田代正廣さん、清野宏さんに相談したところスキーでなければならないという。日本山岳会アルパインスキークラブの会員諸兄姉に計画を披露したが、参加する人は結局いなかったので、ひとりで行くことになった。

じゅうぶん高齢者といえる年代なので、無理をしてはならないことは承知している。「荷物は軽く、行動は短く、山には挑まない」をモットーに計画を考えることとした。

ルートは五能線の白神岳登山口駅から日野林道をたどり、登山口に設けられた登山届記帳所を経て蟻山ルートを白神岳山頂の避難小屋に入る。尾根を南下して、青森、秋田県境尾根にいたり、真瀬岳を経て二つ森までとした。最初は尾太岳までと考えたが、清野さんに「どんなにがんばっても無理、二回に分けろ」と言われて、引下がることにした。

荷揚げと偵察

自分にとって、初日に蟻山尾根を白神岳まで標高差一〇〇〇メートルを上がるのがたいへんなので、荷物を軽くするためにあらかじめ荷揚げしておくことにした。荷揚げと偵察のための山行を三月九～一一日に行った。松神の鹿内善三さんの協力を得て、食糧と燃料約四キロを山頂避難小屋にデポすることができた。昨年に比べると雪の量がかなり多く、蟻山ルートでもスキーがじゅうぶん使えることも分かった。途中で一泊して二日掛けて上がる計画にしようと考えて帰ってきた。いよいよ山行計画の実施の日が近づいてきた。

日程

カナダのスキー登山から帰ったばかりの清野さんから電話がかかってきた。「二〇日には俺も上がって山頂小屋に一泊するから、いっしょに小屋まで上がってしまえ」と。とんでもない迷惑をかけることになった。しかし、ありがたい。日程が一日短縮できる。

結局、白神山地の積雪期単独行は次の日程になった(図1にGPSに入力してもっていったルートと歩いた軌跡の記録を示す)。

三月二〇日（木）一一：三〇蟻山道の登山届記帳所。清野さんと一七：四二白神岳山頂避難小屋（泊）。

三月二一日（金）七：三五避難小屋発。一五：三三県境尾根。一六：〇七テント泊。

三月二二日（土）七：一〇テント地発。一二：五〇最低鞍部。一五：五〇真瀬岳の手前でテント泊。

三月二三日（日）七：三五テント地発。一〇：二八真瀬岳頂上。一六：二〇青秋林道直下台地でテント泊。

三月二四日（月）七：三〇テント地。九：一〇二つ森展望所。一二：一〇清野さんと出会う。管理棟泊。

三月二五日（火）七：一〇管理棟。九：一〇林道起点に鹿内さんの思いがけない出迎え。心配になって様子を見に来たと。驚いたが暖かい気遣いが伝わってくる。国道一〇一号線に出て、アルパインスキークラブの日出平洋太郎さん、津軽三人衆の竹越恵蔵さん、アルパインレスキュー協会の山本一夫さん、鰺ヶ沢警察署、能代警察署、藤里森林センターに下山報告。

地形図

二・五万図　十二湖、大間越、白神岳、二つ森、中浜、二〇万図　深浦、弘前

GPSと地形

毎日の行程を事前に詳しく検討して、GPSにルートを入力しておいた。ウエイポイントとして、顕著な通過点、尾根上のピークとコルを克明に取り上げた。特に曖昧な斜面様の尾根に留意した。白神山地は標高一〇〇〇メートルを境として、それ以上の標高では視界が利かなくなることが多い。標高の高いところはポイント数を密に、低いところではやや疎に選んだ。

GPSはMap 60 Csx。Proximity alarmをonにしておくと、予定地に近づくとビープ音が鳴る。そのたびに現在地と進行方向を確かめ、できるだけ目標を目視で確認した。確認できないときはゆっくり、きょろきょろと左右を見ながら進んだ。その結果、現在位置を見失ったことはいちどもなかった。目視を心がけたため、進行速度はのろのろしていたが、間違った方向に進み、引き返したりしたことはなかった。ルートは百パーセントコントロールしていたと言えよう。

しかし、青秋林道の終点の位置が大問題であった。青秋林道はそこに上がってきていると思っていたコルに林道はなかった。コルの西側に緩やかな台地状の斜面が広がっている。林道はこの台地の末端に上がってきているのか。行ってみると台地は深い沢に落ち込んでいた。林道はどこだ。「沢に下りたら、雪が消えてもお会いすることは難しいですよ」といった清野さんの言葉が脳裏をよぎる。すでに一六：二〇。とりあえず二三日のテントサイトはここと決めた。

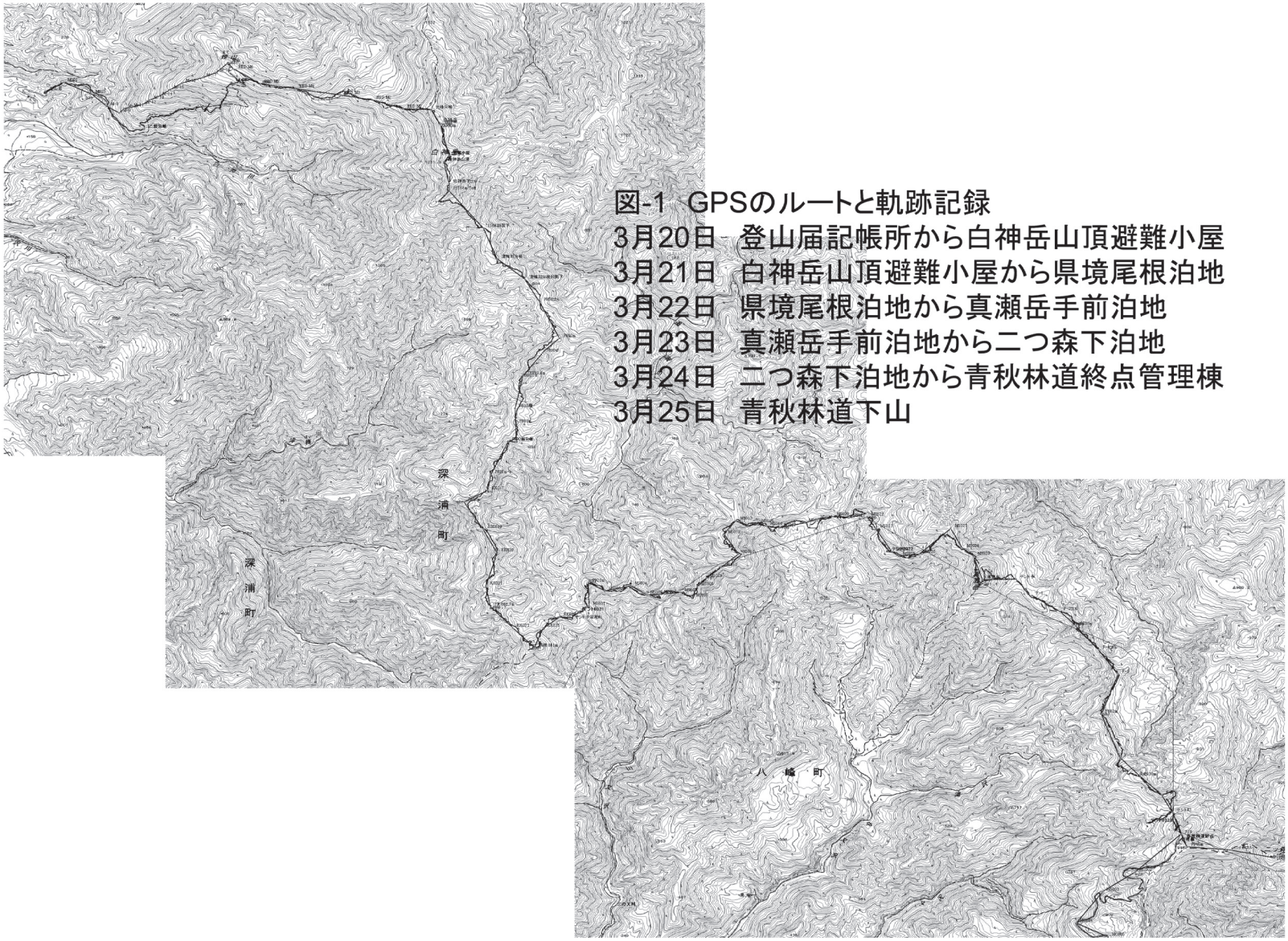


図-1　GPSのルートと軌跡記録
3月20日　登山届記帳所から白神岳山頂避難小屋
3月21日　白神岳山頂避難小屋から県境尾根泊地
3月22日　県境尾根泊地から真瀬岳手前泊地
3月23日　真瀬岳手前泊地から二つ森下泊地
3月24日　二つ森下泊地から青秋林道終点管理棟
3月25日　青秋林道下山

邂逅点は青秋林道の終点としている。そこには管理棟とトイレ棟があるはずである。清野さんは二四日昼ころにあがってくるといって白神岳で別れた。GPSのおかげで、現在地は正確にわかっているが、MapSourceの地図にもカシミール3Dの地図にも林道の終点は描かれていない。林道が描かれていない地図を穴があくほど見つめても次の一歩をどちらに向けるべきか、教えてはくれない。もしも出会えないとすると自分だけでなく、清野さんをも危険にさらすことになる。天気が安定しているのは今日まで、明日は午後からくずれるという。青森五連隊の神成大尉は「天はわれを見放した」と叫んで死んだ。弘前

真瀬岳山頂から白神岳（左）と向白神岳（右）

三一連隊の福嶋大尉は「天に勝つべし」とひるむ部下を叱咤した。天に勝てるか、不安を募らせた一夜であった。

翌朝、三：二〇外へでてみる。朧月。視界は利く。しかし、二つ玉低気圧が北上し、東北地方は午後から雨になるという。五：〇〇明るくなってきた。地形図を広げる。持っている二・五万図は昭和六〇年修正測量版。一九九七年に青秋林道を経て二つ森に行ったときにつけた赤線は、コルを林道の終点としている。この図幅には九四五mのピークから南に延びる尾根の途中まで林道が描かれている。この林道の延伸先がコルではないとすると、どこへつけたのか。間違いなく九四五mのピークの北の肩だ。俺なら、林道をそこへつける。万一、それが違っていたとしても地形図に示された林道まで出ればいい。すれ違いにならないために早く林道に出てトレースをつける必要がある。急がねばならない。とるべき行動が決まった。荷物を置いたままいくことも考えたが、テントを片付けて、すべてを担いでいくことにする。七：三〇出発。左スキーのビンディングのソールプレートにひび割れが生じて、キックターンしようとすると外れてしまう。右手にしていたストックのリングがぐさぐさの雪にうずもれてなくなってしまった。片手片足の道中に難渋しながらも、ようやく九四五mピークに続く尾根を上りきる。目の前に二つ森展望所が建っていた。そして右下に林道が。九：一〇だった。管理棟、トイレ棟もある。まだ人の姿はない。間に合った。約束どおり一二：一〇清野さんが橇をひっぱって上がってきた。

結果的にこの日の朝の判断と行動は間違ってなかった。事なきを得たけれど、忸怩たるものが残った。帰京後のことである。国土地理院の地図閲覧サービスの二・五万図には正確な位置が描かれていることを知った。ほんとうに後悔先に立たず、臍をかむ思いだった。

スキー技術

蟻山でシールを貼り付けてスキーを履いた。Magic Mountainの全面貼り付けシールである。スキーの幅いっぱいに、エッジもかぶさるように切ってある。偵察行のとき、貼り付け方が悪くて、途中で剥がしてしまった。水に濡れたシールを貼りなおすことはたいへんむつかしい。今回は最初に貼るときに慎重に丁寧に貼り付けた。トップとテールをテーピングテープで保護することも怠らなかった。天気がよく、気温が高かったので、昼間は雪がすっかり水っぽくなって、シールもたっぷり水を含んでいた。毎日、テント地に着いたとき、必ず、残照に当てて乾かすことを心がけた。また出発時にはテープを補強することも忘れなかった。これは効果があった。最後に青秋林道を滑走する時まで、シールが外れて困ったことはなかった。

シールをつけたまま、ヒールピースははずしていたので、踵は上がりっぱなしであったから、斜面の下りも快適な滑走というわけにはいかないと思っていた。そのとおりだったのだけれど、慣れるにしたがって、ブーツのバックにもたれるように踵でコントロールす

ることを意識するようになった。両スキーをやや幅広く置き、斜面に正対する。傾斜が急になるところではハの字に開いて制動をかけるが、むしろ大胆に直滑降姿勢で駆け抜けるのがよい。狭い尾根だから、なまじターンを試みようとすると吹き溜まり雪庇から放り出されたり、樹林の中に突っ込んだりする恐れがある。吹き溜まり雪庇の根元をひたすら駆け抜けると、却って安定した滑走ができる。

真瀬岳や最後のコルへの下りで危険な斜面に出会った。さらさら、ざくざくした大粒の乾いたザラメ雪が表層に顕れている。この斜面を横切ろうとするとまわりがざあーっと崩れる。雪粒の安息角は五五度であるから崩れるに任せた雪の斜面はたいへんな急傾斜になる。思い切って急な斜面に向って直滑降の姿勢をとり、自分に動きがでたとき右に左に方向を換えて、その斜面から逃れることができた。この時のターンはもちろんプフルークを使った踵コントロールである。

いささか不思議とさえ感じたのは、ハの字に開いた踵コントロールのターンは意外に難しくなかったことである。曲がろうと思っただけで、スキーの先端はそのほうを向いていく。山回りだとか、谷回りだとか、ターンを意識しすぎると、却ってスキーを突っかけて転倒の原因になった。

天気

三月一九日、出発の日の地上、高層天気図、週間予報を詳しく点検した。天気の変化は激しくなく、穏やかな天気が緩やかに変化すると予測した。週間天気予報は二四、二五日に崩れるが、それまでは晴の予報であった。入山してからは天気概況に注意していたが、気象通報によって天気図を描くことはしなかった。二四日の二つ玉低気圧の通過による雨が何時ころになるかに注意して、その日は無理に下山することなく、管理棟での停滞を選んだ。午後になって本降りとなったから、この選択は正しかったと言えるだろう。

装備と食糧

自分で準備し、運ばねばならないので、一点ごとに慎重に吟味した。重さあたりの性能がいいもの、あるいはカロリーが高いもの、そして値段が安いものを選んだ。

装備は仕様と重量を表にして、チェックリストにした。ザックはMountain Dax60で容量は六〇リットル、重量は二・六キロである。大きな雨蓋にえんじ色のスタッフバックに入れたNationalのヘッドランプと予備電池CRV3が一個、携帯電話foma F883iESと充電器、黄色のバッグに入った単三の電池（オキシライド）が四二個。カメラ、GPS、携帯電話の充電器に共用できる。プラスチック袋に二・五万地形図、GPSのルートを印刷したナビ用の地図。予備のめがねケース。ナイフ・コンパス、スキーを引き摺る紐、温度計、ルーペ、雪払い用のたわしなど一二点、二・一キロを納める。ザックの上段にはテント（Arai Air Raiz）など九点、二・九キロが。中ほどにはショベル、炊事具など一六点、四・〇キロが、底のほうには寝袋、修理具など九点、三・九キロが詰まっている。背負い紐にはGPS（Map60Csx, e-trex Vista）が一個ずつ。スキーはTRAB Freeride（108, 78, 93）に締め具はEvolution light。軽いこのビンディングに問題があった。靴はGarmont。カードラジオSony ICR-520と予備電池CR2032は上着の胸ポケットに。AM放送しか受信できないが、天気予報だけが聴ければよいとした。

食糧はその日の行動予定と献立をひとつの表にした。例えば三月二二日の朝は県境尾根の八六一m付近のテント地で、アルファ米におにぎり用の菜めしと自家製の梅干を混ぜてご飯にし、乾燥味噌汁に手製の干し肉を入れる。お茶を飲んで、テルモスに熱湯を入れて出発。行動食は真瀬岳の上り付近で、自家製のロールパン五〇グラムを四個、干し肉をかじり、スープとコーヒを飲む。夕食は二つ森のテントサイトで青菜、梅干の混ぜご飯、レトルトの海老と貝柱のクリーム煮をコヘルにあけ、湯をすこし加え五グラムのキッコーマン醤油で味を調え、自家製の干し肉三〇グラムを加えて少し煮る。最後にお茶。実際にはまずぬるい湯を〇・五～一リットル飲んでから食事の支度にかかった。レトルトは他に蟹のクリーム煮、筑前煮、肉じゃがなどがあった。自家製の干し肉は安いオーストラリア産の肉を醤油と砂糖、みりんで少し濃い目の味をつけ、天火乾燥したものである。

ガスは一日に二五〇グラム缶一個を予定した。食糧と燃料は一日約一キロ弱であった。

総括

冒頭にも記したようにこの山行では「荷物は軽く、行動を短く、山には挑まない」をモットーとしていた。自宅を出発したときの荷物は一八キロ弱、帰宅したときは一七キロ弱であった。これが基礎重量であって、これに食糧、燃料などの消費財が一日あたり一キロ弱が加わる。白神岳避難小屋を出発したとき背負ったのは二一キロ強であった。これが重いかどうか。炭俵（一五キロ）一・五俵は小学生並の働きでしかないことは確かである。

初日の一七：四〇までの行動を除けば、連日一六時頃には泊地を決めていた。日没が一八時少し前であるから、余裕がある行動と言えようが、望むらくは一四時頃には切り上げたい。連日天気がよく、気温の高い日が続いた。いい天気に不服をいってはならないのだけれど、日射、熱射は行動を阻害する。

白神岳までは入山者もいて、たいてい何人かの登山者に出会う。しかし白神岳を出たとたん、最後の日に清野さんに出会うまで、誰にもあうことはなかった。鹿内さん以外に出会ったのは林道起点付近の除雪の作業員だけであった。ワカンの跡をつけていった先行者も初日に津梅川のほうに去っていった。あとは山中でコガラ、キツツキの鳴き声、カモシカ、ウサギ、クマなどの痕跡と戯れるばかりだった。圧巻だったのは、二四日の朝、九四五mのピークへの尾根をあえぎあえぎ上っている時だった。クワーッ、クワーッ、クワーッ。鋭い鳴き声に見上げると鶴が北のほう、岩木山に向って飛んでいく。銀色に輝く一羽を先頭に、二十数羽が二〇度ばかりの角度に並び、はたたいていった。美しい、力強さに心の奥が激しく揺さぶられた。思う存分、心ゆくまで白神山地に耽溺した一瞬だった。

白神山地は奥深いけれど、決して静寂の山ではない。梢をうつ風の音、鳥のさえずり、獣の気配。山全体が賑々しかった。まだ山菜の季節ではないが、木々はすでに活発に動き始めていた。山は饒舌ですらあった。さらさら流れる雪の斜面にであって緊張したけれど、技術的に難しいとは感じなかった。楽な山行ではなかったが、奥深い山は優しかった。天気にも恵まれて、ひとり旅を心ゆくまで楽しむことができた。豊饒の山は人を拒んではいない。人が人を規制しているだけだ、と強く感じた。山が拒むのは山を理解しようとしない者、自利自欲の行動に狂奔する者たちだけなのだ。

至福のひとときを持つことができたのは清野宏さんの強力なサポート、鹿内善三さんの暖かい心、日出平洋太郎さん、竹越恵蔵さん、田代正廣さん、山岳レスキュー協会の山本一夫さんのご支援の賜物である。あらためて心からの感謝を捧げたい。

後記

詳細な資料、記録、写真等が入用なときは筆者まで請求されたい。

図書紹介

黄河断流—中国巨大河川をめぐる水と環境問題

福嶌義宏著　昭和堂

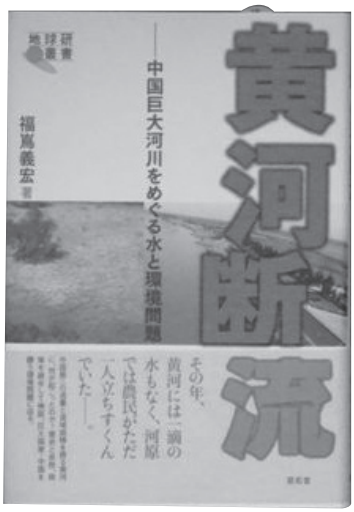
高村奉樹

中国の黄河下流域で流水が消えた！

一九七〇年代にはじめて報じられたときには何が起こったのか戸惑ったのは私だけではないだろう。それ以来、一九九七年には「断流」日数が年間二二六日、断流区間の最長は七〇四キロメートルに達したが、これは洛陽市から河口近くまでの実に九〇％である。世界の古代文明のひとつを生み出し、遣唐使時代から洛陽への道であった黄河の水が絶えるとはどういうことか。この問題を広域調査と気象や水文学データの検索から具体的に解き明かすために総合地球環境学研究所の通称「黄河プロジェクト」が企画されたが、本書はその総括者 福嶌義宏教授（ＡＡＣＫ会員）によって、現在までその成果を明らかにするために著された。

当初は「断流」の発生原因は諸資料から下流の取水によるのではなく、上流から供給される水量の低下にあると推測された。それでは既に指摘されているように上・中流域での近年の降水量の減少、農地灌漑水の過剰利用のみによるのであろうか。これも断定はできないというのが実状であった。

黄河は源流から河口まで主流の総延長



五四〇〇キロメートル、流域面積七五万平方キロメートルにおよぶ大河である。標高五〇〇〇メートルのチベット高原北東部の水源に発して、青海湖の南で竜羊峡ダムに貯溜されたのち、急流下して蘭州市近傍の劉家峡ダムで水力発電に利用される（註1）。ここで北に向きを変え銀川周辺の青銅峡灌漑地区を潤し、さらに北流して広大な黄土高原を巡り、その東北屈曲地、標高一〇〇〇メートルの頭道拐水門観測所に至るまでが上流域。ここから南流ののち西安の東で向きをかえ三門峡ダム、洛陽の西の小浪底を経て花園口の水文観測所までが中流域、花園口から渤海河口近くの利津水文観測所までが下流域である。利津から渤海へは天井川で堤防が続く。

第Ⅰ部　黄河に何が起こったか　では章を追って上記の黄河各流域周辺、領域の気候即ち降水量、年平均気温の長期変動が検討され、黄河の開発と保全の状況、堤防の決壊による氾濫を防ぐ下流域ダムの役割と限界が記述される。上記の各区間における黄河水量の年間の収支を明らかにするために、著者は共同研究者とともに開発、改訂した長期流量変化のモデル（註2）をあてはめたところ、一九六〇年から四〇年間の人為操作を含めた流量の季節変化とその年収支がきわめて良好に再現された。だがひとつの区、中流域の頭道拐―三門峡間ではそれが適合しない。

第Ⅱ部　「黄河断流」はどのように起こったのか？　では、以上の作業の経過が多くの図と表で示される。核心となるのは第八～九章で、黄河の長期流量変化の解析モデルを補正しつつ中流域の水収支の実態に迫る。この区域は大部分を黄土高原が占め、毛時代に「水土保持」の山腹植栽事業、近年では農地の耕作禁止を含む「退耕還林還草」策が進められた地域を擁している。そこで上記の長期流量変化のモデルにこの期間の土地被覆の進度にあわせた植物の葉面積、蒸発散に関する係数を組み込んで再計算した結果、区間の月流量、年水収支推計値の推移は観測された実数値によく近似したのである。つまり黄土高原における森林や草地の造成による蒸発散量増加の影響が区間の一五〇億トンの水損失をもたらしたことを理論的に証明したことになる。これは今まで中国の研究者からも指摘されてこなかった新知見である。このあらたな事実の解釈について、

第Ⅲ部　「黄河断流」からみた地球環境問題において、黄河断流のあらたに認められた要因、換算すると年間四九ミリ相当の森林被覆による流出水量の低下について、これは「マイナス効果と判断されかねないが、洪水流出量低減や土壌浸食量の軽減を通じて、下流河床の安定化に寄与することが今後広く認められるだろう」とコメントしている。さらに興味があるのは著者が最後に梅棹忠夫氏の「文明の生態史観」を援用して黄河の三〇〇〇年を考えるところであろう。詳しい説明は省くが、乾燥帯の西部や北部の遊牧騎馬民族と中原の華北平原から関中の農耕民族との間の争い、時代による入れ替わりの舞台となったこの地域の草地と農耕地、即ち広範な地域の環境と今後の持続的生業のあり方について、ことばは少ないが根源的な問いを発している。過酷な労働を強いられる農耕が放棄される場合や無理な灌漑が維持できなくなる場合は、遊牧の文化も復活するかもしれないと。このくだりには中国における今後の新しい水利用開発、長江の水を一二〇〇キロメートル以上も導水する「南水北調」についてのコメント同様に、対象とする地域の生態環境の研究は時間、空間を十分広くかつ精緻にあつかうべしという一貫した姿勢が示されている。なお「南水北調」については、その効果に期待しつつも南部河川に棲息する微生物や小動物が地域間を移動することによる悪影響、水質汚濁が進行している長江下流の水が天津、北京に送られ、やがては渤海湾に膨大な汚染が広がる懸念について注意を喚起している。

筆者は二〇〇三年福嶌チームの黄河巡検計画に参加して、銀川灌漑農場の大規模な水田、西寧の生態農業試験場付近の麦畑での畑地灌漑の様子などを観察した。多くの灌漑システムは

大いに改善の余地があり、地区によっては塩害防止の対策が急務で、悲劇的結果を避けるためには、いわゆる文化技術（川田順造 一九九七）の違いを超えた日本の技術の支援が必要であろうと感じたことを付記しておきたい。

本書は黄河断流の原因解明だけでなく各流域の水利用について持続的で効率的な都市、工業用および灌漑用の配水計画に寄与するところが大きいだけでなく、中国文明の背後に視線を向けて、環境的、歴史的に日本とは異質の巨大な生態環境構造にせまろうとする先駆的な書でもある。

註1　福嶌義宏　二〇〇四　黄河の源流　ＡＡＣＫニューズレター　No.30

註2　福嶌・谷口編　二〇〇八　黄河の水環境問題―黄河断流を読み解く　学報社

ＡＡＣＫが京都大学に寄贈した「国際登山探検文献センター図書」はどうなっているのか？

竹田晋也

これまでの経緯

一九七三年に京都大学学士山岳会に「国際登山探検文献センター」が設置されました。設立当時（一九七三年四月一日現在）の蔵書文献二七七四冊、資料四二点が収録された文献目録は、一九七四年三月にＡＡＣＫ時報・臨時号として発行されています。その後、収集・寄贈された文献も合わせてながらく本部構内赤レンガの事務所に保存されてきました。

二〇〇〇年に吉田キャンパス整備に伴い事務所を明け渡すことになったので、文献センター所蔵図書は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に研究資料として寄贈されることになりました。図書寄贈も含めた事務所移転作業は二〇〇〇年五月二五日に完了しました（ＡＡＣＫニュースレター 一七号）。

アジア・アフリカ地域研究研究科では、当時のＣＯＥ（中核的研究拠点形成プログラム）図書ワーキング・グループの木下秀美さんを中心とするスタッフのかたがたに受け入れ作業を引き受けていただきました。副本をのぞいた後の登録冊数は四一六七冊で、その目録は二〇〇六年五月に発行されて会員の皆様のお手元に届けられました。

社団法人京都大学学士山岳会（二〇〇六）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科所蔵　社団法人京都大学学士山岳会国際登山探検文献センター図書目録、二五一頁。

図書の利用の仕方

現在、図書は京都大学附属図書館地下Ｂ下「ＣＯＥ」に配架されています。インターネット上の「京都大学蔵書検索」https://op.kulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/catsrk.do から貸出中かどうかも確認できます。実際に京都大学附属図書館で閲覧・複写をしていただくこともできますが、残念ながら学外の方への貸し出しは認められておりません。しかし身分証を提示すれば複写のために一時持出はできます。

「国際登山探検文献センター図書」は京都大学に寄贈されたため、貸出の制限など会員の皆様の利用上で不便になった点もあります。しかし専門の司書の手で登録され、附属図書館に配架されていますので、管理状態は以前よりも改善されています。社会のより多くの人々に利用していただけるようになっていますので、会員の皆様にはご理解をいただ

ければ幸いです。

現在、収蔵場所の狭隘化が問題となっているため図書館自体は新たな寄贈本の受け入れには積極的ではありません。しかし未収蔵の書籍を寄贈していただける場合には、受け入れの打診をしてみますので、竹田までご一報ください。

以下、学外の方への利用案内を転記しておきます。

学外の方への利用案内

京都大学附属図書館では、京都大学の学生・院生および教職員の学習・研究のために多くの資料を所蔵収集しています。これらの蔵書は、一般にも広く公開しており、閲覧・検索・複写等のためにご利用いただけます。

ご来館の際は、蔵書検索KULINEにて目的の資料の所蔵有無、所蔵館をご確認ください。KULINEの所蔵館に「附図」と記載されている資料は、当館に所蔵されております。

入館について

・インフォメーションカウンターにて、利用申請書に記入をお願いしています。

・入館バッジをお渡ししますので、館内では、必ずよく見えるところに付けてください。退館時にはバッジをお返しください。

・ロッカーは用意しておりません。貴重品は常に携帯してください。

・試験期間中は混雑が予想されるため、入館をご遠慮いただきますようお願いいたします。

・入館は図書館資料の閲覧・検索・複写に限定しております。

・自習室としての利用は、固くお断りします。

・見学を御希望の場合は、事前にご連絡ください。

ご利用可能時間

表1参照

利用について

・空いている閲覧席をご利用ください。

・所蔵調査にはKULINEを、KULINE未登録の資料は、カード目録や冊子体目録をご利用ください。参考カウンターへお問い合わせください。

・書庫内資料は出納します。入庫カウンターでお申し込みください。

表1

サービス内容	平日（月～金）	土・日・祝日
開架図書の閲覧	9:00-22:00	10:00-17:00
蔵書検索	9:00-22:00	10:00-17:00
書庫内図書出納 ＊昼休み中は行いません。（12:00-13:00）	9:00-12:00, 13:00-21:00	10:00-12:00, 13:00-16:00
参考調査	9:00-16:45	-
文献複写 ＊セルフコピー機は、土・日・祝日も利用可能です。	9:00-16:45	-

・書庫内資料の閲覧、および資料の一時帯出には担保となるものをお預かりします。身分証明書、またはそれに代わる物をご用意ください。（免許証／保険証等）

・資料の複写は、現金（一枚三五円／平日のみ）・生協カード専用のセルフコピー機・一時帯出のいずれかをご利用ください。資料によっては、複写不可のもの、マイクロ撮影でご利用いただく資料もあります。（相互利用担当）

・来館前の所蔵調査が確実です。FAXで受付けています。（参考調査担当）

【附属図書館資料運用掛　二〇〇八・一・二一更新】

会員ニュース

本年四月一六日に開かれた社団法人日本山岳会京都支部の総会で当会会員岩坪五郎、荻野和彦両氏が第三回今西錦司賞を受賞された。

これは平成一二年三月の大日岳事故に対して、その支援活動、現地調査そしてこのような事故防止を願って昨秋出版された「北アルプス大日岳の事故と事件」の、出版に至るまでの中心的な活動を顕彰されたものです。

事務局報告

【理事会決議録】

一、日時　平成二〇（二〇〇八）年三月九日（日）
午後二時～午後四時

二、場所　京都市左京区吉田河原町15-9
京大会館一〇三室

三、出席理事
上田豊、前田栄三、松林公蔵、田中昌二郎、福嶌義宏、前田司、中川潔、永田龍、吹田啓一郎、山田和人、竹田晋也、小林尚礼
以上一二名

委任状によるもの
横山宏太郎、松沢哲郎、高尾文雄、人見五郎、牛田一成　以上五名

欠席理事　なし

出席監事　西山孝、伊藤宏範　以上二名

四、議事の経過および結果
会長上田豊が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案
平成二〇（二〇〇八）年度事業計画について
理事吹田啓一郎によって作成された平成二〇（二〇〇八）年度事業計画が説明された。第一事業第一項（五）で本会主催のチョゴリザ峰初登頂五〇周年記念のフォーラムを開催すること、第四事業第三項でヒマラヤ学誌の発行形態が現状と同じであれば会員配布を実施すること、また第四事業第一項で隔年発行の会員名簿を平成二〇年度は発行しないことを確認し、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案
平成二〇（二〇〇八）年度収支予算について
理事竹田晋也によって作成された平成二〇（二〇〇八）年度収支予算が説明された。特にチョゴリザ峰初登頂五〇周年記念のフォーラムには特別会計遠征基金から事業費の集会・渉外費により支出すること、中国雲南省における梅里雪山隊捜索関連には特別会計遠征基金から支払調査助成金により支出することについて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案
新入会員について
担当者より下記一名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。
平野桂介

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

平成二〇（二〇〇八）年三月九日
社団法人京都大学学士山岳会理事会

ニュースレターのホームページ掲載について

ＡＡＣＫホームページ（http://www.aack.or.jp/）には本誌ニューレターもそのまま転載して紹介しております。

このホームページはどなたでもアクセス可能であるため、会員動向などの個人情報については割愛しております。しかし会員相互の情報交換という本誌の性格上、本文の記事についても執筆者が不特定の方に開示することを望まれないこともあろうかとおもいます。このような場合はホームページへの公開を断る旨、発行までに編集子にお伝えください。

会員動向

編集後記

新米の編集子が最も心配するのは原稿が集まらないこと。心当たりの諸兄に片っ端から執筆のお願いをするとなんと今回は新しく六本もの原稿をお寄せいただいた。本文に写真、地図も添付されているのですべてを今号に掲載すると相当ページが膨らむがこれはうれしい悲鳴です。会員の活動を少しでも早くお伝えすることを第一義としたい。

正月の朝日テレビの地球温暖化をテーマにした番組で、上田豊氏がヒマラヤの氷河の上空を飛びその異変を訴えるということで氏の登場を期待していましたがそこは割愛されておりました。このフラストレーションを解消するため本誌で登場を願い三〇年間の氷河の変化を語っていただきました。写真を出来るだけ大きくしてその変化を見ていただけるようにしました。地球温暖化の問題はこれからも取り上げて行きたいと思っております。

総合地球環境学研究所のプロジェクトのひとつ「高地文明」に当会会員の多くが参加。この活躍をこれからも紹介したいと思っておりますが、まずは斎藤清明氏に序論を執筆いただきました。

さて今年はチョゴリザ初登頂五〇周年。当会が主催する記念行事は今秋に計画されておりますが、初登頂なった八月四日に合わせて八月中旬発行予定の本誌四六号をチョゴリザ初登頂五〇周年号とします。五〇年という歳月によって醸し出される話を存命の遠征隊員に語っていただこうと企画しております。会員誌であればこそのエピソードなども聞けるのではと思っております。もちろんこの特集以外の原稿も大いに歓迎します。六月二〇日までにお寄せください。

（前田　司）

編集委員　前田　司
発行日　二〇〇八年四月末日
発行所　京都大学学士山岳会
〒六一五―八五四〇
京都市西京区京都大学桂
京都大学工学研究科建築学専攻
吹田啓一郎　気付
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
（株）土倉事務所